
異形の魔道士

IOTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の魔道士

【Nコード】

N5985V

【作者名】

IOTA

【あらすじ】

魔物に席卷されつつある凄惨な世界。そこに突如現れた機械を纏いし戦闘狂。彼は何を思い、何と戦うのか。SFファンタジー。

多分の残酷描写を含みます。あと主人公最強要素を含みます。苦手な方は注意してください。

プロローグ

緻密な刺繍が施された豪華な衣裳で着飾った白髪の老翁、国王デイスウは、自身の住居であり、権力の象徴でもあるはずの城の廊下を、おぞましい魔窟を往くような忌々しげな表情で歩いていた。

死屍累々。廊下には点々と、時には数名が折り重なるように、兵士の屍が無造作に転がっていた。

大半の者が身体に奇妙な創を負っていた。剣や槍、矢によるものではない。何か鋭い物が突き刺さり、周囲の組織諸共貫けていったような傷口だった。軽装な兵士だけでなく、重装兵の隙のない戦甲冑にまで同じような孔が穿たれている。

廊下の突き当たりにある両開きの扉、一際多い屍が取り囲むように倒れていた。流れ出た血が小さな池を作り、頭痛を伴うほどの臭いを放っている。

国王がその扉に正対すると背後に居た数十名の従者の内の一人がすかさず駆け寄り、扉を開け放つ。

中には、天蓋付きのベッドに腰掛け顔を両手で覆う少女。国王の衣裳と似た装飾のドレスを纏っている。国王は少女を中心に取り囲む女官達を押し退けると、少女の前に屈み込んだ。

「私の娘よ……。一体何があったのだ？ 話してごらん」

「……」

しかし少女は微動だにしない。顔を覆う手が微かに震えていた。

「畏れながら」白銀の甲冑を身に着けた従者の一人が歩み出て、国王に一礼すると言葉を継いだ。「正体不明の賊がミリア王女様の部屋に侵入したのです」

国王はその兵士を睨み付け、癩癧を起こしたように怒鳴った。

「見ればわかるわ、戯けが！ なぜミリアの部屋に賊の侵入を許したのだ！？ 全体どうやって賊はこの部屋に入ってきたのだ！？」

兵士は再び一礼すると、国王に顔を近付け、耳元で囁く。

「……どうやら賊は魔道を使うようです」

「魔道士だと！？」

国王の吃驚にその場は一瞬硬直した。ややあつて、兵士は言葉を続ける。

「賊は奇怪な姿をしており、恐ろしく強力な未知の武器を持っていたらしく、単身でありながら駆け付けた近衛兵達を次々と殺害しました」

「単身と言ったか？ 賊は一人だったのか！？」

「畏れながら」

「……なんという」

国王はこの部屋に達する前に目にした惨状を思い返していた。自身の城をまるで戦場に変えてしまったかのような死体の数。転がるのは兵士の死体ばかりで、見慣れぬ死体が一つもなかった。あれでは戦とは言えまい。虐殺だ。戦場ではなく家畜の屠殺場だ。その虐殺を、たった一人で。

「魔道士とは言え、それほどの手練を余は見聞にして知らぬ。その賊は魔物の類か、……よもや反逆者達の手の者ではあるまいな」

「申し訳ありませんが、現状では如何とも判断できません」

国王は未だに顔を上げようとしないミリア王女と呼ばれた少女を一瞥し、再び兵士に問う。

「それで賊は？」

「すでに城から離れて、どうやらこの王都からも脱しているようです。複数の目撃情報によると森へと入ったとのこと」

「兵を出せ。その賊を何としても探し出すのだ。そして可能ならば生きたまま連行しろ」

「は。仰せのままに」

兵士は一礼し、部屋から離れた。

国王も扉に向かうが、途中で足を止め、再びミリア王女を見遣った。その眼差しは我が子への心痛といった物ではなく、どこか不審を帯びていた。

「それとな、表の死体を片付けろ！ 臭くてかなわんわ！」

国に忠誠を誓い、殉死した兵士の亡骸に向けて心無い言葉を吐きながら、国王は部屋を出た。

国王が去った後、心配そうに声を掛けてくる女官達を一切意に介さず、ミリア王女は顔を隠したままだった。

その口角は歪に吊り上がっていた。

1 鴨撃ち

身体は人の形をしているが、首から上は狼だった。

長く突き出た顎に、ぱっくりと開いた大きな口。鋸のように並んだ歯。だたりと垂れた紫色の長い舌。感情を感じさせない小さな眼球の中心では金色の瞳が爛々と輝いている。全身漏れなく体毛に覆われており、黒色に限りなく近い群青色の毛並みは熱気に蒸れ、汚物に塗れ、遠く離れていても悪臭が漂ってきそうである。

そのような異形の者を形容するに相応しい言葉は、狼男。

狼男が倒れた青年の腹部を喰い裂き、内臓を引き摺り出している。狼男が老人の頭部を擦じ切っている。

一際大きな狼男が血塗れの少女の腕を乱暴に引っ張っている。

青年は白目を剥いて咯血し、老人の頭部は蒼白な無表情で転がり、腕を砕かれた少女は泣き叫んでいる。

拡大された視野の中で、異形の者達による蹂躪が繰り広げられていた。

「……」

傾きかけた日が色濃く闇を落とす鬱蒼とした森林。

拓けた小高い丘の頂上に腹這いで寝そべる男が一人。その男もまた、異形だった。しかしその男は紛れもなく人間である。容姿が常軌ではないだけだ。男が纏っているのは、衣服ではなく、機械だった。拳動の障害にならぬよう角をとった滑らかな外殻。薄い灰色の塗装が所々剥がれ、黒色の合成金属が覗いている。頭部までもが機械に覆われており、一見すると丸みをおびたヘルメットに甲殻虫を彷彿とさせるガスマスク。眼球のように丸く貫かれた二つの穴が淡い赤に輝いている。

男は眼下、約二百メートル先の閑散と家屋が点在する村の惨劇を窺っていた。

長大な小銃を伏撃^{フロン}ちで構えている。歪な長方形の箱から太い銃身のみが飛び出しているような形だ。前部銃床の先端に取り付けられた折り畳み式の二脚架を開き、地面に置き固定している。

浅く息を吸ってから、親指で銃把のすぐ上に設けられた安全装置を解除した。

すると、男の隣に薄い後光を放つ半透明の、まるで幽霊のような少女が現れた。

『ちよつと。なに、攻撃すんの？』

鈴のように透き通った声色。

男は顔を起こし、少女を見遣る。純白のワンピースにボブカット。地に足を付けてるが、足元の草は倒れず、半透明の足首の中で風に揺れていた。この少女は実在していない。その声も姿も、男の視界と意識の中にのみ存在していた。

「流石に見過ごせないだろう」

『でも不用意な戦闘はまずくない？ 積極的な行動を起こすのは、この状況、いや、この世界の情報をもう少し収集してからの方がよくない？』

「じゃあ、黙って見過ごせと？」

少女は嘆息し、投げやりな様子でひらひらと片手を振った。

『しゃーないわね。決定権はあなたにある。任せるわー』

男は返事をせずに即座に頭部を小銃に添えて保持すると、幼女を弄ぶ一番大きな狼男に視野を定める。照準眼鏡^{スコープ}の類は装着されていないその小銃だが、男の視界そのものが集束するように拡大され、様々な数値が現れる。目標との距離、射角度、風速、弾丸の降下率。「始めるぞ。目を付けといてくれ。射線と重なりそうな村人にも注意だ」

『りょーかい』

そして最後に縦横から伸び中心で交わる十字線が現れた。小銃を

極小さく動かし、十字線の中心を狼男の右目に乗せた。

「ヘッドショット、エイム」

お前が大将か。なあ、そうだろう？

心内で問い掛け、

『ファイアファイア、ファイア』

少女の声に、引き金を落とした。

圧縮空気により射出された細長い特殊合金の矢が超高速回転しながら秒速千メートルで飛翔。コンマ二秒で狼男の右眼球に飛び込むと、矢は着弾の衝撃を利用し傘の骨組みのように膨らみ、より軟らかい方へと突き進む。骨組みの一本いっぽんが剃刀のように鋭く、脳漿を掻き混ぜ、筋繊維を断ちながら、首筋の後ろへと飛び出した。やや遅れて、血液と膨らんだ矢が細かく刻んだ諸々の組織が射出孔から噴出する。

狼男は頭部を仰け反らせ、そのままゆっくり後ろに倒れた。

不意に自由になった幼女は、何が起きたのかまるでわかっていない様子で、泣きじゃくりながらその場に蹲る。

『ひひ。ワンこころの眼球にブルズアイ』

陽気な調子で囁く少女。男は次々と発砲する。

スカーン、スカーンと、減音装置が組み込まれたエアライフル特有の透き通った銃声が控えめに響く。ほどなくして、少女はふうん、と嘆息する。

『つまんない。目を付けるまでもないわ。まるで鴨撃ちねえ』

狼男達はギャンギャンと喧しく吠え、右往左往するばかりで、反撃はおろか、隠れようとしもない。頭部や頸部、胸部から血を噴き、次々と倒れていく同属を見ても、何が起きているのかすらわかっていない様子だ。

「まあ、それも当然なんだろうな」

狼男だけではなく、村人達ですら不用意に立ち上がったたり、きよるきよると周囲を見渡したり、わざわざ安全な家から飛び出して、駆け回っている。何を勘違いしているのか、跪き、天に向かって両

手を組む者も居た。

おそらく、“この世界には銃撃という概念すらない”。

十匹居た狼男は、ものの二十秒も掛からずに残り二匹になった。二匹は何度か吠え合つと、東西に向かつて同時に駆け出した。その先には森林がある。遁走しようとしているのだ。

『おつと、多少の頭はあるようね』少女は言う。『東をやつて。西に目を付けとく』

「諒解」

狼男は速かった。前傾姿勢で疾走する狼男に対して、慎重に狙いを定めていたのでは照準が追いつかない。人間の全力疾走など比べ物にならない。おそらく身体能力においては人間のそれを凌駕しているのだらう。故に丸腰で村を襲い、悪逆の限りを尽くせるのだらう。

男は素早く立ち上がり小銃を構え直すと、安全装置と兼用されているファイアセクターを切り替えた。弾種六ミリボール、フルオートモード。すると小銃が僅かな機械音を発し、四倍に拡大されていた視野が二倍ほどに引き戻される。照準の形も十字線から赤い光点へと変化した。

狼男の進路を先読みし、引き金を切った。ヴヴウンと、先ほどとは違う。携帯電話がバイブレーションするほどの僅かな銃声。発射されたのは矢状弾ではなく、直径六ミリの通常弾。それが毎分千発の連射速度で吐き出される。森林に達しようとしていた狼男の周囲で土埃が舞い、頭部を庇うように左手を上げ、倒れ込むのが見えた。『三時方向。二百四十三メートル。ポイントマーク』

少女の言う方向に小銃を振った。指示された地点が矢印として視野に映る。矢印から少し右にずれた位置に狼男の脚部が見えたが、深い藪に飛び込み、姿を見失った。

『……チッ。速いわね。流石ライカンスロープ』

男は立ち上がながら尋ねる。

「ライカン？　なんだそれ」

『ギリシャ語で狼男を指すリュカントロポスの変形語。つまり狼男のカッコいい言い方』

「ふん、流石アーカーシャ・ガルバ。物知りだな」

アーカーシャ・ガルバとは、虚空蔵菩薩こくうざうぼさつのサンスクリット語であり、無限の智慧と慈悲を持った菩薩である。

「智慧はともかく、慈悲とは懸け離れているがね」

『それより、どーすんのさ』

「ああ」

男は村の方角を顎でしゃくる。

「最後の狼男、まだ息がある。近くで見てもよう」

2 姉御

血を吐き散らしながら悶絶する狼男。弾丸が腕や脚を貫き、腹部を切り裂いたのだろう。至るところから大量に出血し、裂けた腹部から臓物の一部がはみ出していた。

それでも逃れようと、森林の方へ這っている。

背後から迫る男の姿を認めると、ぎゃんぎゃんと喧しく吠え立てるが、途中で大量の血液を吐き出し、力なくその場に突っ伏した。

男は狼男から数メートルの距離で止まった。

「なあ、おい。言葉わかるか？」

頭の上に付いた三角形の耳をピクリと動かすが、返事はない。男を見ようともしない。まさに氣力を失った犬のような反応だ。

『無駄でしょ。言葉を解するほどのお頭つむだとは思えない』

「それにしても、なんなんだろうなこいつら」

『わかんない。おとぎ話の狼男のように人間が変身した姿、と言うよりも、もともとこういう形の種として存在している感じがしら』

「……ファンタジー的な容姿という点では、俺達の世界の“アレ”と似ているが」

『そういう意味では類似点はいくつかあるけれど。でも戦闘能力は全然違うし———』

少女は言葉を止め、早口で男に告げる。

『背後、熱源複数。近付いてきている』

男は弾かれたよう振り返り、小銃を跳ね上げる。

そこには数人の男達が立っていた。銃口を向けられ、大きく肩を揺らして目を見開き、その場で固まってしまふ。それは村人達だった。鍬くわや鋤すき、鎌かまを手にしている。

「……背後から襲おうとしていた、ってわけでもなさそうだな」

剣呑な農機具を携えてはいるが、如何にも不安げに両手で胸元に引き寄せていた。明らかに戸惑っている。男は村を迂回する形で瀕死の狼男に接近したので姿は視られていない。村人達は先の狼男の鳴き声を耳にし、様子を見に来たのだろう。

男は小銃を下げ、声を張る。

「おい。言葉わかるか？」

村人達はそれを受けて、顔を見合わせ二言三言小声で話し会々と男に向かって恐るおそるという風に声を掛けてきた。

「……………」

しかしそれは男の知らない言語だった。疑問文であろう事を辛うじて理解できる程度だ。

「アーシャ、翻訳できるか？」

『多少の田舎訛りはあるっぽいけど、城で聴いたのと同じ言葉ね。実はもう言語学アーカイブと照らし合わせてあるの』アーシャと呼ばれた少女は自慢げに言う。『精度は七十五パーセント、不明な箇所は前後から推察した意識でいいのなら、翻訳できる』

「上出来だ。やってくれ」

「……………」

ぼつりぼつりと言葉を続ける村人。アーシャは村人の声の質までコピーして同時通訳のようにタイムラグなく翻訳する。

「あなたは一体誰ですか？ 助けてくれたのはあなたですか？」

「そうだ。誰かは、説明できないが、敵ではない」

男の言葉もアーシャがこの世界の言語に置換して発声する。村人の声と同じく、男の声色をコピーしていた。だが当然男の口から発されているわけではないので、男の耳には他人の声のように聴こえた。

村人達は男の返答を受け、再び顔を見合わせ小声で囁き合う。常人であれば聴こえない音量であるその囁きも、アーシャはすかさず翻訳する。

「喋ったぞ。人間だ」

「王都の兵士か？」

「しかし、あんな鎧は見た事ないぞ。気味が悪い。まるで虫の化け物だ」

「おい、口を慎め。あの方は恩人なんだぞ」

「でもそれは本当か？ 本当に彼が助けてくれたのか。奴らの仲間じゃないのか。だってまだあの魔物は生きてるぞ」

男は小さく嘆息し、小銃を瀕死の狼男に向けると、淀みなく引き金を絞った。

狼男の頭の鉢が吹き飛び、どろりとした脳漿が地面に滴り落ちる。狼男は小刻みに痙攣した後、動かなくなった。

「！」

村人達は目の前で起きた現象、いや、超常に目を剥き、驚きの声を漏らした。そして瀕死であるとはいえ狼男を葬ったのを目撃し、敵の敵は味方という事なのか、男は大して期待していなかったのだが村人達は意外なほど素直に胸元で構えていた農機具を下げた。

「あなたは……」村人達は瞠目したまま男に訊く。「魔導士様」
「なのですか？」

「ちよつとー！」

そこで突然、村の方向から女性の怒声が響いてきた。

「戻ってきて手伝えつてのお！」

「ちよつと待つてくれ！ 今、助けてくれたっていう人が」

村人の一人が振り返って返事をするが、途中で遮られる。

「うるせー！ ぐだぐだ言つてねえで怪我人運ぶの手伝えつつてんだよ、このどち○ポ野郎！ その助けてくれたって人も連れてきな！」

村人達は苦笑すると、何人かは村に引き返して行った。一番年長であろう一人だけがその場に残り、窺うように男を見遣る。

「すいませんが、我々の村に来てくれますか？ 貧しい村ですし、あんな事があつた直後ですので、もて成しはできないかもしれませんが」

男が考えていると、アーシャが自身の言葉を発した。

『せっかく友好的に接触できたんだし、情報を収集しておいても損はなくなるかい？』

男は村人に対して頷き、小銃を背に回し携行武器保持用のマグネツトプレートに固定すると、駆けて行く村人の背を追う。

「おい、アーシャ」追いながらアーシャに訊ねる。「さっきの女の声、どち○ポ野郎ってのは、本当にそう言ってたのか？」

『ひひ。実は私も耳を疑ったんだけどさ』アーシャは弾むような声色で言う。『ビチグソ野郎か、どち○ポ野郎で迷ったけど、ニユアンス的にはどち○ポ野郎が近かったから。話が合いそうな女性が居るっばいね』

村は意外に大きな規模だった。森林の丘から見た時には、重なり合う樹々が邪魔をして全体を把握できなかったのだろう。もっとも、大きいとはいったものの男の予想よりという意味であり、家屋の数は三十にも満たない。全て木造の平屋で、あちこちに畑や納屋、家畜小屋らしきものがある。日は完全に落ちてしまい、所々で松明が灯っている。

そしてその頼りなく揺れる灯に照らされて、そこここに死体が転がっていた。

忙しなく駆け回る村人達は皆が虚ろな目で、衣服や手が血に塗れ黒ずんでいた。痙攣しているのではないかという程に激しく震え、蹲る少年。どう見ても事切れている女性の首筋の裂傷を手で押さえて、周囲に助けを求めている青年。まだ五、六歳であろう小さな亡骸の前に跪き、抜け殻のような無表情で肉片を拾い集める女性。男が撃ち殺した狼男の死体を泣き叫びながら鍬で殴打している男性。

外気に曝されたばかりの血と臓腑が放つ咽返るような臭いに、涙腺が刺激され目がちかちかする。

「……戦場はどこも変わらないな」

『あれ、そう？』アーシャは不思議そうに小首を傾げる。『私達の世界の戦場跡には、民間人なんて居なかったじゃない。死体と、そ

れを分解してエネルギーに変える無人戦闘兵器が動き回ってるだけでさ」

男は小さく嘆息する。

「まったく、救われるよお前には」

ある家屋の前、男を村まで案内した村人が一人の女性と話をしていた。村人は離れ、その女性が近付いてくる。

「やあ」

彼女は片手を上げて挨拶する。声色から察するに先ほどの怒声の主のようだ。三十歳前後だろう。ブロンドの髪を後ろでひつつめている。手を差し出してくるが、その手が血塗れであるのに気付き、焦ったように引つ込めた。

「ごめんごめん、握手はまた今度って事で。またすぐ行かなきゃならないからさ」

「いや、いいんだ。それよりも少し訊きたい事がある」

「あんたがかい？ あは。そりゃこっちの科白さね。ま、悪いけど後でね。まだ息がある人もいるから。とりあえずお礼と自己紹介がしたかったんだ。あたしはサイミュス・ミレン・メイフェ。サイって呼ばれてる」

彼女、サイは少年のようなあけっぱろげな笑顔を浮べた。

「ありがとう」

「いや、別に」

「おいおい。お礼を言われていやとか、別にとかう奴があるかよ。本当にありがとう。あんたが助けてくれなかったら、この村は全滅してた。恩人だよ」

「ああ……。どういたしまして」

「うん。それでいい。それで、できれば手伝ってくれるかい？ 怪我人をあの大きな家まで運んで欲しいんだ。この様子じゃあ落ち着くまで夜通し掛かるだろうし。明日の朝までここでこーしてつつ立つてもしょうがないだろ」

男は目を丸くしてしまう。恩人だと言った矢先に、随分な物言い

である。しかし同時にサイのそんな物怖じしない奔放な性格に親しみを覚える。先ほど村人達が苦笑しつつサイの声に従った理由を理解し、男もマスクの中で微苦笑した。

「わかった。手伝うよ」

「そっかそっか。じゃ、どーせ血塗れだ。ここで汚しちまいな」

言って、サイは再び血に塗れた手を差し出してくる。男が怯まずにその手を握るとサイは軽快な笑みを見せた。

「あは。意外と暖かいんだね」

「？ いや、そんなはずは」

男の手は指先まで合成金属の薄い装甲板で被われ、その下も人口筋肉が組み込まれた強化繊維で包まれている。間接部でさえ地肌は一切露出していない。温もりといえるような温度には程遠い。

「違う違う。手が暖かいつて意味じゃない。ここさ、ここ」

サイは自身の胸を叩いてから、駆けて行った。

『……うあー、かけー。ツンデレ属性じゃないわね。どっちかっていうと男勝りの姉御って感じ。なんか想像と違う』

「ああ。お前とは全然話が合わなそうだな」

男は最寄の怪我人に向かって歩き始めた。

3 並行世界

最初は皆が男の姿を見ると怯えたが、害意がなく、手を貸してくれるのを見ると、すぐに畏怖の視線は消えた。

男は、始めは負傷者を比較的大きな家の広間に運ぶだけだったが、その手当てが酷く杜撰なのを知り（具体的には裂傷だろうが、骨折だろうが、四肢が千切れていようが、薬草という謎の草木を捻じ込んで包帯を巻くだけだった）、自身の持つ軍事医療の技術とアーシヤの医療知識を併せ持つて、出来る限りで適切な処置を施した。しかし医療具や医薬品が皆無であり、精々確実な止血や熱消毒により感染症の予防、骨折部の固定、熱病者への対処程度しか出来る事はない。それでもその処置によって一命を取り留める者も多く、それを目の当たりにした村人達は始めは見よう見まねで、次第に男に指示を仰ぐようになり、最終的に男はその場を仕切っていた。

サイはその場を男に任せると、村の奥の丘にある自宅に比較的に込みのある重傷者を運ばせた。村人達の話から察するにサイは村唯一の“魔術士”であり、治癒魔術を用いた治療を行うとの事だった。負傷者への処置が一段落するまでは明け方までかかり、指示しなくとも村人達が適切な処置を行うようになったのを見て、男はその場を離れた。

太陽が低く昇り、白い光が村を染め始めていた。

生々しかった血の跡が黒く変色しているのが目に付くが、人間の死体はもうない。とりあえず納屋に置き、後は遺族の任意で順次土葬にするという話だった。しかし狼男の死体はそのままだった。処理にあぐねているのだらう。男の狙撃による銃創だけでなく、全身が傷に塗れている死体もあった。村人が鍬で殴打していた場面を思い出す。

無数の蠅がたかり、吐き気を催す悪臭を放っている。男の纏っている機械には呼気の内循環システムがあり、外気を遮断する事も可能だったが、有害なガスにでも曝されない限り男は使わなかった。戦場で生き残るためには臭いも重要な情報なのだ。

男は家屋の外壁を背に、その場に座り込んだ。アーシャもその隣に現れた。

『流石に疲れた？』

「いや……。なんか関わり過ぎた気がしてな」

『もう手遅れでしょ。あんなに色々な医療技術を教えちゃって、きつとこの村だけ一世紀分ぐらいは進化しちゃったわよ。かく言う私も手を貸したんだけどさ。もし過去の世界にタイムリープとかいう話なら、タイムパラドックスとかで色々ヤバイんでしょうけど、でもどうやらそうじゃない』

アーシャは確認するように周囲を見渡し、続ける。

『知識アーカイブの過去の歴史をさらってみたけど、私達の世界のどの時代にもここは存在していない。文明の発展レベルは中世ヨーロッパと類似するけど差異も多い。そして、ここが私達の宇宙の違う銀河の惑星だとも考え難いわ』

空の太陽を指差すアーシャ。

『だって天体の位置や動き、方位の磁針測定による北極と磁北極のずれ、全てが私達の居た惑星と寸分も違わず合致しちゃってる』

「つまり、やはりここは」

そう、とアーシャは男の言葉を継いだ。

『並行世界、平行宇宙、パラレルワールド』

「異世界か」

確認するような男の呟きに、しかしアーシャは眉を吊り上げた。

『はあああ！？　なによ、そのランキング上位を独占してる鉄板設定みたいな単語。どいつもこいつも異世界、異世界、異世界って、そんなに好きなら異世界でもどこでも行きやがれってんだ！　そしてもう帰ってこなくていい！』

アーシャはわけのわからない、本当に皆目さっぱりわけのわからない怒声を放つ。

『異世界と並行世界は全然違う。異世界は次元からして違うけど、並行世界は私達の宇宙と同一の次元を持っているとされている。137億年前に起こったビッグバン。その過程で無数の、無限に近いほどの宇宙が生じた。その同一次元を持ちながら交わる事のない無数の世界を並行世界と呼ぶ、というのが仮説の一つ』

「その言い分だと、未だ証明されてない理論みたいだな」

『そう。人類が自分達の宇宙の端っこに到達できれば、解明できるかもね』

人類が、いえ、私達の星が存在している内には無理でしょうけど、とアーシャはぼやく。

それ以前に人類が“アレ”の災厄を生き残れるのか、と男は苦笑する。自分が見知らぬ世界に来てしまったからこそできる、他人事のような苦笑だった。

『話を並行世界に戻すけど、さっき言った通り、並行世界は無数に存在している。全てのIfに、あらゆる可能性に対応してるが如くね。たとえば私達の居た世界とほぼ同一、差異といえばあなたの身長が一センチ高いだけの世界もあれば、惑星環境は同一なのにその上で起こっている事はまるっきり違う、という世界もある』

「ここのように、か」

『ズバリ。ま、現状を鑑みるとその仮説が一番近いというだけの話。推察でしかないし、証明しようがないけれど』

アーシャは曖昧に言葉を結んだ。

ほどなくして、丘の上の家からサイが歩いてくるのが見えた。

「やあ、おはよう。ま、お互い寝てないだろうけど、朝の挨拶はおはようさ」

サイの顔には疲労が色濃く浮かんでいた。目の下には深い隈ができてる。

「そっちの状況はどうだい。少しは落ち着いたかい？」

言いながら、扉が開け放たれたままになっている家屋の中を窺うサイ。

「ああ。落ち着いた、と言うよりも重傷者がみんな息を引き取っただけだ」

「おいおい。それでもあたしが予想してたよりも、随分大勢の人間が助かってるじゃないか。あんな医術、どこで習ったんだい？ 断言するけど、王都にさえあんたほどの医官はいないよ」

「……」

沈黙する男を見て、サイは言及しようとはせず、狼男の死骸を見遣った。

「それにしても、魔物共が現れてからこつち、この地に安全な場所なんてないって知ってはいたけど、酷いもんさね」

男はサイの言葉のある部分に反応し彼女を見遣った。

「魔物が現れた、と言ったか。もともとこの世界には魔物という種が存在していたんじゃないのか？」

「あんた……」

サイは露骨に怪訝そうな顔をした。きっとそれはこの世界では呼吸するのに等しく誰でも知っている事実なのだろう。そんな事すら知らないこの男は一体。

「ま、立ち話も難だし、家に来なよ。朝飯食ってないんだろ。散らかってるけどね」

サイの後に続きながら、男は音声の外部出力を遮断して、つまり誰にも聞こえないようにアーシャに話し掛けた。

「彼女、魔物が現れたと、本当にそう言ったのか？」

『ええ。間違いなくそう言った。……まるで、私達の世界と同じね』

サイの家の中は野戦病院の様相を呈していた。血に塗れた布切れ、棒切れ、血の混じった水瓶、その他諸々が所狭しと転がっている。散らかってるけど、と言っていたサイの言葉には謙遜も誇張もなかった。

椅子を引っくり返して、載っていたゴミをばらばらと床に散らし

てから、サイは着席を促す。男は黙ってそこに座った。正面の机には血だけでなく、明らかに肉片と思しき赤黒い塊が載っていた。それを指で弾きながら訊ねる。

「この家に運んだ重傷者はどうしたんだ？」

サイは竈や調理具が並ぶ台所であろつ場所に立ち、朝食の準備を始めていた。

「ある程度治癒できた人は各々の家に帰したよ。絶対安静で動かせない人は奥の部屋で女達に診てもらつてゐる。駄目だった人は納屋に運んだ」

「治癒か……」

治療ではなく、治癒。それは病氣や怪我が治つたという事を指す。治癒魔術というもので治したのだらうか。

ほどなくしてサイが運んできた朝食は、お世辞にも豪勢とは言えない粗末なものだった。パンの塊にサラダ、葡萄酒、作り置きであるう豆のスープと動物の骨付き肉の煮込み。この世界の平均的な朝食なんて男は知らないのです、もしかしたら来客用の贅沢な食卓なのかもしれないと思つたが、対面に座つたサイは「こんな物しか用意できないくて悪いね」と苦笑した。

そうしてサイは机に頬杖をつき、男の様子をじいつと見ている。

「……」

男はヘルメットの止め具を解き側に置いてから、マスクを外しに掛かる。首の後ろにある気密密着コックを緩めると、プシュという音が僅かに鳴り、顔面とのギャップが広がる。後頭部の止め具を幾つも外しようやくフリーの状態になつたマスクを前方から、まるで脱皮するかのように外した。

「ああ」サイは粗野に笑つた。「随分若いんだね。しかも色男だ」

男は顔から判断するに二十代前半。サイの言う通り整つた造形をしているが、健康的な感じではなく、肌は白というよりも青白く、頬は瘦け、目の下にはサイのような寝不足からくるものではない、慢性的な隈があつた。眼の色は深く、暗く、黒い。

「ま、安心したよ。一応、飯が食えるちゃんとした人間みたいだ。じゃ、いただきます」

「いただきます」

マスクを外してもサイの声は翻訳され、男の声も置換された。そして冷やかすようににやにやしているアーシャの姿も視える。それらの作業はマスクが行っていたわけではない。翻訳や発声は未だ男の下顎から後頭部に掛けて覆っている薄いゴムのような素材のインターフェイスアーマーが行い、アーシャの姿は男の眼と脳にインプラントされたサイバネティック・モジュールが見せている。

すでにこの世界の構成物質が自分の世界と同一である事をアーシャに調べてもらっていたので、男は躊躇わずに食事を口に運んだ。味もお世辞にも美味とは言えなかった。全体的に味が薄い、と思ったらスープは異様に濃い。まるで足りない塩分を全てスープで補おうとしているかのようだ。それがこの世界の味的感覚なのか、単にサイの料理に問題があるのかは判断できなかった。

「で、あんたは何者なんだい？」

サイは手掴みで骨付き肉を齧ると、その骨を男に向けてくるくると回した。

「王都の兵士でもないだろうし、傭兵でもない。違う大陸の人間でもないよな。そのおかしな甲冑、しかも狼男の群をたった一人で皆殺しなんて、見た事も聞いた事もないよ」

「……」

真実を言うのは憚られ、嘘を付くにもこの世界の事を知らな過ぎる男は沈黙するしかない。

「だんまりかい」サイは気を害した風もなく肩を竦める。「ま、名前ぐらいは聞かせてくれよ、見慣れぬ人。名無しってわけじゃないんだろ」

ホテリナイナ
「……H09」

呟くような男の声、しかしそれは置換されず、と言うか置換のしようもなく、サイは「は？」と眼を丸くし、アーシャは困ったよう

に男を見ていた。

「ほて、なんだって？ もう一回言ってくれよ。てか声が小さいよ」

「いや、ヘカトンケイル……。ケイル、ケイルだ」

男はすぐに言い直す。というか咄嗟に思い付いた名前を口にした。

「ケイルか。珍しい名前だね」

「……」

サイは男に対して名前が無いわけではないだろうと言ったが、それは正鵠を射ていた。男には名前というものがない。個人を識別するのはH09という記号だけだった。そしてこの時咄嗟に口にしたケイルという名が、初めて男を人間として指す名として周囲にも、彼自身にも刻まれる。

『安直』

ぼそつと呟くアーシヤを無視して男、ケイルはパンの切れ端を机に置くと、サイを見詰めて、切り出した。

「悪いが、知っている範囲でいいから、この世界の事を全て教えてくれ」

サイは一瞬呆けたが、怪しむでも言及するでもなく、語り始めた。この大陸の名はラナ大陸。帝国、王国、共和国、大小様々な国があり、この国は国王デイソウの下で統治されたライガラ王国。ライガナ王国はこのラナ大陸において、一番の国土と人口、そして兵力を有しており、諸外国に戦争を仕掛けては、支配下を拡げていた。

しかし、二十年前に世界情勢が一変した。魔物の出現である。

魔物はどこからともなく、ラナ大陸全域、そして他の大陸にも突如として出現し、虐殺の猛威を振るった。この時から戦争という言葉が指す意味は、国と国の国力争いではなく、国を挙げた魔物からの侵略防衛に変わった。時には魔物を大陸から駆逐すべく国々は連携しこれにあたったが、無尽蔵に現れる強力な魔物達に結果は凄惨たるものだった。

今はどの国も防戦一方であり、護りの堅い都市から離れた村や町が襲撃を受けてはゴーストタウンと化してる。

「この村、ポルミ村っていうんだけどさ。あんたが来てくれなかったら、ここもそうなった。繰り返すけど、ありがとうよ」

「護りの堅いという都市に移り住むわけにはいかないのか？」

「あー無理無理。ここから一番近いのは王都なんだけど、もう定員いっぱいの状態なのさ。方々から避難してきた人達が王都を囲む城壁の門前にキャンプ生活を強いられる状態さ。もし大規模な魔物の進攻があつたら、真っ先に喰われちまう」

サイは不意に眉間に深く皺を刻み、唾棄するように言う。

「むしろ時間稼ぎか、魔物達の腹を満たして帰ってもらうための生贄か、そのために城壁の前に締め出してるのかもね」

サイの様子から察するに、その可能性は多分にあるという事が窺い知れる。つまりこの国の国王ないし支配階級にある者達はそのような事を本気で考え、実行に移したとしても不思議ではないような連中なのだろう。

「あんたはこの村の魔術士らしいが、魔術についても詳しく教えてくれるか」

「それも知らないのかい？ 村人達はあんたの事を魔道士様だと言ってただけだね。ま、いいさ」

そうしてサイが語った魔術の説明は少々難解なものだった。サイは流暢に喋っているのに、時折翻訳が止まってしまふのは、この世界の魔術界における独特な専門用語にアーシャは戸惑い、それなりの言葉に置換しているからだろう。

魔術について簡単に言うならば、魔術は誰でも使えるわけではない。魔術士の系譜による遺伝か、生まれ付いての才能が必要になる。

魔術には二種類あり、基本的なものを魔術、高尚で強力なものを魔道。それを遣う者の呼称も前者を魔術士、後者を魔道士と呼ぶ。

サイは魔術士にあたるらしい。

魔術の発現には精神エネルギー（この辺りの胡散臭い言葉がアーシャによる意識だ）とそれを通じ易い媒体が必要になる。それは指輪だったり杖だったり、火や土だったり、個人の性質や発現しよう

としている魔術によって様々。サイの場合は、魔術士にとっても基本的で基礎となる水を媒体とした治癒魔術が得意。

先の治療では傷病者の自然治癒力を強化促進させた。そして今、サイは精神エネルギー（笑）を使い切り、非常に疲弊している。数日も経てば身体の疲れと同様に回復するらしいが。

「と、言うわけでもう限界。あたしは寝る。あんたはあのベッド使いな」サイは部屋の隅にある血に塗れていないベッドを指差す。「この家にある物はなんでも好きに使っていいから」

「いや、待ってくれ。まだ泊まると決めたわけじゃない」

「おいおい。村の恩人を朝飯だけで追い出したなんて言ったら、孫の代までの恥だよ。しばらくゆっくりしていつておくれよ。それに世話になりっぱなしで申し訳ない限りなんだけど、実は頼みたい事もあるんだ」

言って寝室であろう扉に手を掛けるサイだが、ふと立ち止まり方向転換し、別に部屋の扉を引き開けた。

すると、複数の甲高い悲鳴と共に、扉にぴたりと張り付いて聞き耳を立てていたであろう女性達が雪崩れ込んで来る。

白いエプロンに頭巾という姿から察するに奥の部屋で傷病者を診ていたという女性達だろう。女性というよりも少女といった方が適切であろう年齢の彼女達は、ケイルを見ると頬を染め、きやあきやあと騒ぎ出す。

「このリトルビッチ共が！ あんたらもういいから、家に帰って休みな！ 布団の中でケイルをおかずに変な妄想するんじゃないよ！」

セクハラおやじのような下品極まりない事を言って少女達を追いつ帰すが、その時に開けられた玄関の扉の向こうでも、大勢の村人達が中の様子を窺っていた。

彼らは目を点にしているケイルの姿を認めると、口々にサイに向かって声を張る。

「おいサイ！ あんたこそ変な事する気じゃないだろうな！」

「狡いわよこの魔女！ ビッチウィッチ！」

「なんでこんな汚いところに泊めるんだ！ おいあんた、家に来なよ。恩人に我が家の葡萄酒を振舞わせてくれ」

そんな野次のような言葉の数々にサイは大きく嘆息し、つかつかと歩いて行って玄関の扉を思い切り閉めた。

「悪いね」ケイルに向き直ると、バツが悪そうに苦笑する。「辺鄙な村で、魔物が現れてからは客人も滅多に来ないんだ。その客人が恩人だっただから尚更さ。わかってやってちょうだい」

「驚いた。あんな事があつた直後なのに、随分と逞しいんだな」

「まあね。魔物の襲撃は初めてじゃないから。大犬や怪鳥程度の弱い魔物だったら男達だけで辛うじて撃退できてたんだ。勿論、死傷者ゼロってわけにはいかないから、みんな慣れちまったんだろうね。ま、あそこに集まっていたのは身内を亡くさなかった連中だけみたいだし」

どこか寂しげに、諦めたように言うサイは後ろ手に片手を挙げて「おやすみ」と、寝室に入っていた。

ほどなくして、外の村人の気配が消えてから、ケイルはマスクとヘルメットを外した時と逆の手順で装着し、ベッドに腰掛け、壁に背を預けた。

その隣にちょこんと腰を下ろしたアーシャは嫌らしい笑みを浮かべる。

『もてもてねえ。なに、鉄板ハーレム路線でいく気なの？』

「黙れ。それより聞いたか？」

『聞いたも何も、私が翻訳してあげてるんだっつーの』

「二十年前か……」

『そう。二十年前、突如として現れた怪物。圧倒的に不利な人類。消極的な防衛戦。……まるで私達の世界と同じね』

3 並行世界（後書き）

アーシャは何を言ってるのか、本当にさっぱりですね。

不快に思う方がいたら知らせてください。修正します。

4 ヘカトンケイル

地は瓦礫、天は曇天。

灰色に染まった世界を一人の兵士が駆けていた。

『背後に熱源複数。完璧に喰い付かれた』

彼の符丁はH09。
ホテリナイナ

ヘカトンケイル・プロジェクトにより生み出された、強化外骨格を纏った人造の兵士だ。

12.7ミリのアーミングバレットでさえ貫けないレベル？の軽量且つ強靱な積層合成金属装甲。随所の稼動部には加衝撃時にのみ硬化するダイラタンシー効果を利用した半液状装甲衣。内側には人工筋肉と各種センサーで構成された強化衣服を纏っている。それらで覆われた外殻は兵士というよりも兵器と言った方が近い。

中に収まるのは人間ではあるが、ただの人間ではない。エグゾスケルトンを使いこなすためには人体組織に細胞レベルからサイバネティック・モジュールを組み込む必要があった。だが通常の兵士はこの改造手術に耐える事ができない。拒絶反応が現れ、術中にショック死、良くて廃人となってしまう。当然である。ある種の移植手術を行うのだから適合するか否かが問題になるのだ。

そのために彼らは造られた。エグゾスケルトンのサイバネティック・モジュールに遺伝子レベルで適合するために遺伝子操作を施し、人工授精により生み出され、人工子宮の中で急成長したバイオロイドである。

だが、それでもその製造の成功率は十パーセントにも満たず、掛かるコストは膨大だった。故にたとえ友軍が全滅するような事態に

陥ろうとも彼らだけでも生存できるように、様々な生存率向上装置が組み込まれている。その代表例が長期単身活動用支援システム『アーカーシャ・ガルバ』。謳い文句は、死が二人を別つまで常にそこに居る相棒。^{パートナー}

ヘカトンケイルの語源はギリシャ神話に登場する巨人達。五十の頭と百の手を持つ姿をしていると云う。そのあまりの醜さに封じ込められたが、ティーターノマキアーと呼ばれる神々の戦いの際に解き放たれ、味方を勝利に導いたとされる。

そう、彼らには戦うべき敵がいる。故に遺伝子操作の禁忌を解き放ち、造られた。

二十年前、何の契機もなく突如として現れた異形の怪物。悪魔のような外見と獰猛さから、ヘブライ語で破壊、奈落の底、滅ぼす者を意味する『アバドン』と名付けられた。

アバドンの身体能力は地上のあらゆる動物を凌駕し強力ではあるが、知性も指揮系統も持たずに生身で突進してくる獰猛な獣であり、通常兵器でも殺傷できない事はなかった。だが問題なのはその数と、そして出現方法。

彼らは所構わず、不意に出現する。まるで最初からそこに居たが視えなかっただけという風に、瞬きして目蓋を開けた瞬間には大拳としてそこに居るのだ。時には鉄壁に構築された基地の司令室内に、時には軍事活動とはなんの関係もない閑散とした田舎町に、時には街を埋め尽くすアバドンの大群に核兵器使用を決定した国の代表者が「神のご加護を」と呟いた瞬間、そのシェルター内に、あらゆる常識を度外視し、幾重もの外的防御策を無視して現れる。

現れた瞬間、彼らは戸惑うような素振りを見せるのだが、それは刹那。次には目に映る動く物を全て破壊し、喰らい尽くす。そして不意に現れる彼らだが、決して消える事はない。一度現れたら死体となっても留まり続ける。

アバドンの生態については着々と研究が進められたが、ことその出現方法となるとまるで解明されていない。これは地球外生命体からの侵略であり、アバドンは彼らによって転送される生体兵器であるとか、出現直後のアバドンが戸惑うような様子を見せる事から、彼らも何者かによって強制的に転送されているだけなのだとか、様々な仮説が飛び交ったがゴシップ記事のような憶測であり、あらゆる物理法則を無視したその出現現象を科学的見地から解明する事は不可能だった。

そんなアバドンとの戦闘にヘカトンケイルは極めて有効であったが、その製造成功率の低さから総数が少なく、対するアバドンは無尽蔵。

二十年に及ぶ果ての無い戦いの中で、戦争は積極的な敵の殲滅戦ではなく、少しでも生き永らえるための消極的な防衛戦へと変わり果て、文字通り神出鬼没、否、神出であるアバドンの対策として人類は集団で纏まる事を避け、規模の小さな長期生活型地下シエルターで少人数の生活を強いられていた。

現在のヘカトンケイルの任務と言えば、そのシエルター間を行き来し、その防衛と地上に既存するアバドンの活動範囲を偵察するというものほとんどだった。始めは経済的な理由から単身作戦行動に長けるように造られた彼らだが、その特性はLRAR（長距離強行偵察）に極めて適していたのだ。

この瓦礫を駆けるヘカトンケイル、H09の任務も、いつも通りの偵察任務であった。

『熱源、更に増加。感知範囲内だけでもその数、百四十三……！』

いつも通りとは言え、その任務は決して容易なものではない。獐猛な怪物が大挙して闊歩する地上を単独で彷徨わなければならない。対アバドン用として開発されたヘカトンケイルだが、相手が数十、数百となれば、どうにもならない。現にH09の兄弟と呼ぶべき他のヘカトンケイル達が命を落としたという報告が月に一、二件は耳に入る。

『……駄目ね。逃げ切れない。この状態でシエルターに駆け込むわけにもいかない』

そして今度はH09の番だった。

H09は立ち止まって振り返り、小銃を射つ。正確無比な頭部への三点射で次々と前列のアバドンは薙ぎ倒されるが、それを足蹴にしながら怒り狂ったように押し迫る赤い波。

H09は他のヘカトンケイルと会った事がない。専用訓練施設で同期生だった他のバイオロイド達は皆、サイバネティク・モジュールに適合できずに命を落とした。実戦配備されてからも強力で貴重なヘカトンケイルを一箇所に複数配置するような作戦は採られなかった。

『さよならね。造られたあなたが天国に逝けるかはわからないけど、もし逝けたら、兄弟達と仲良くね』

だからアバドンの牙に、爪に、角に、引き千切られる寸前に彼が思ったのは、

他の兄弟達はどんな姿をし、どんな声を出し、どんな事を考えているのか。

ただそれだけを知りたかった。

ベッドに腰掛けてから二十分後、ケイルは目覚めた。

長期単身活動用に作られたヘカトンケイルは、数十分の睡眠で十分に疲労を回復できるように出来ていた。一週間程度なら食事も水も摂らず、排泄さえも行わずに不眠不休で動き続ける事が可能だ。

外に出ると、強い光を照らし始めた太陽とは対照的に、村は静まり返っていた。皆が完徹の作業で疲労困憊し、休んでいるのだろう。手持ち無沙汰のケイルはとりあえず狼男の死体を近くの森に投棄した。一箇所に重なるように放置する。死体を側に置いておくのは精神衛生上も物理的な衛生面でも良くないからだ。

次に村の中を歩き回り、表に投げ出されている破損した鍬や鋤を失敬すると、鉄製の部分のみを取り外し、腰のバックパックから取り出した小さな糸鋸のような形状の超高熱溶断器で適当な大きさにカットする。

背の小銃を手に取り銃床上部のハッチを開け、カットした鉄片をそこに押し込んだ。小銃がブウウンという振動と僅かな熱を発する。ケイルは自身のサイバネティック・モジュールでウエポンステータスを視界に映す。機関部、銃身、空気圧縮装置、弾丸生成機能、照準センサー、全てに於いて異常はない。装弾数はフレッシュエツト、三十二。ボール、九十八だった。

ほどなくして振動が止まると、ハッチ側面の小さなランプが緑に点った。ハッチの反対側、銃床下部にある不純物排出孔から砂や細かい鉄粉がばらばらと落ちる。ケイルは「ちつ、やっぱりゴミが多いな」とぼやきながら小銃側面を叩いてそのゴミを完全に排出すると、再びステータスを確認する。装弾数は五十、百二十に増えている。それが最大装填数である。

ケイルの持つ小銃は圧縮空気を利用したミリタリーモデルのエアライフルだ。正式名称、MCモデル レイピア ABR2。通称レイピア。形状こそシンプルなブルパップタイプであるが、ヘカトンケイルのサイバネティック・モジュールにリンクした各種センサーが埋め込まれ、更に長期活動により補給が受けられない事を踏まえ、適当な鉄片があれば弾丸を自動に生成する機能を備えた特別仕様である。その所為で元来のモデルよりかなり大型になり、狭所での取り回しの面では難があるが、約十キロという機関銃なみの重量についてはエグゾスケルトンの人工筋肉によりデメリットにはならない。

深刻な資源不足が軍需にまで及び、薬莢や火薬などを一切使わない、所謂エコな銃器の開発が急がれた。ケースレス弾薬の実用化や音波兵器、果ては光学兵器など、様々な有象無象が研究開発されたが、最も実用的なのはエアライフルだった。それらは従来から存在

していた競技または狩猟用のエアライフルを元に開発された代物だが、軍用というだけに従来の物とは性能は比べ物にならない。火薬を使用する一世代前の銃器に勝るとも劣らない。

『わざわざそんな薄汚い鉄くずを使わなくても、まだ支給されたレイピア用の弾倉はあるでしょ』

アーシヤは呆れたように言うが、ケイルも呆れたように肩を竦める。

「ここは瓦礫の山とは違うんだ。鉄は貴重だろ。長期活動支援用のお前がそんな怠けた事言うなよ」

『お茶目な事言うのもアーカーシヤ・ガルバの仕事なの。死が二人を別つまでつつてね』

ケイルは傷病者達が詰めている村中央の大きな家屋に向かった。呻り声や咳がところどころから聞こえるが昨夜とは比べものにならないほど静かだった。付き添いの村人達も居たが、大半の者が傷病者の側で突つ伏すように寝ていたので、代わりに一人ひとりを診て回った。圧迫止血を処していた者達の血を抜いてやり、再び圧迫し直す。熱病者の頭や脇の下に冷たい水で濡らした布を当てる。

起きていた者は例外なく感謝の言葉を述べるが、ケイルは小さく頷くだけで次の傷病者の元に向かう。床に臥せりながらも皆がそんなケイルの姿を何か神々しいものを見るような目で追っていた。

「やる事がないな」

家から出たケイルはぼやく。

『さつきからまあ細々と、ワーカーホリック丸出しね。ゆっくりすればいいじゃない。あなただってこんなんびりできるような状況生まれて初めてでしょうに』

「のんびりできるような状況なのか。お前のスパコンが俺達の現状に答えを出したのか？」

『わかんない』

口を半開きにして舌を出し、視線を虚空に彷徨わせるアーシヤ。思いつ切りアホっぽい。というか馬鹿にしている。

『だって、私のスパコンが“わかんない”って答えを弾き出しちゃってるのよ。慌てたつてしょーがないじゃない』

「……あの瞬間、俺は死んだと思ったんだが」

『私もそう思ったんだけどね。でも次の瞬間にはあの部屋に居た』

ケイルは思い出し、にやりと笑う。

「そういえば、お前随分良い事言ってたもんな」

『なっ！？ なんの話よ』

「さよならね。造られたあなたが天国に逝けるかはわからないけど――」

『ち違うわよ！ そんなクツサイ科白一体どこの誰が言ってたつてのよ。私はやられる瞬間、残像だ、って言ったのよ！』

「残像出せるほど速くは動けん……」

サイの家のある丘を村とは反対方向に下り、薄い雑木林を抜けると、小麦であるう穀物の畑が広がっていた。収穫の時期は近いようで、膨らんだ小麦は茎もたわわに実っている。微風に撫でられる度に金色の海の如く波うち、さらさらと鳴っていた。

突然、アーシャは駆け出し、あははとか、うふふとか、笑いながら小麦畑を跳ね回り始めた。当然、彼女は実在していないので小麦が倒れるような事はなく、背の高い小麦が半透明の身体の中で透けて見える。

「……なにしてんだよ」

『キヤツチャー・イン・ザ・ライ。ライ麦畑でつかまえて。さあ、私をつかまえてごらんあそばせつ』

「あそばせて……。ライ麦じゃなくて小麦だし、物理的に存在してないお前を捕まえるのは物理的に無理だ」

『真面目かつ！』

「お前、こつちの世界に来てからちよつとおかしくないか？ 前はもう少しまともだった気がする」

『心配された！？』

「いや、お前がおかしいって事は、俺のサイバネティック・モジュ

ールに異常が」

『真面目過ぎる！』

真面目な話、アーシャは壊れてしまったわけではない。ヘカトンケイル専用の長期単身活動用支援システムであるアーカーシャ・ガルバは、その存在理由に則って、ケイルをリラックスさせようとしているのだ。

人間が単独で長期間活動しなくてはならない時、一番問題になるのが孤独感だ。迷った時に相談できる相手もいない、休息の時に談笑できる相手もいない、いざという時に助けてくれる相手もいない。そんな状況が長く続けば、人の精神は瞬く間に壊れてしまう。人は一人では生きていけない。戦いも然りである。

ヘカトンケイルのバイオロイドは遺伝子操作と薬物投与、洗脳紛いの催眠施術により、通常の人間に比べてそういった負になり得る感情が抑制されているが、完全に消去されてしまっているわけではない。負の感情も生きていく上では必要であり、戦いに勝利し生き残るためにも必要不可欠な要素なのだ。

そんな人間の部分も多分に残したヘカトンケイルが、単身で長期作戦行動に従事するために造られたのがアーカーシャ・ガルバ。アーカーシャ・ガルバはヘカトンケイルの戦闘を戦術面で支援し、時には雑談し、時には談笑し、時には喧嘩さえも行うために存在する。アーカーシャ・ガルバの科学的理屈を説明するのは些か困難である。まず、アーカーシャ・ガルバは単なる人工知能ではない。人工知能を限りなく人間に近付けたとしても、結局は人間に類似する存在でしかなく、所々に齟齬や矛盾が生じ、始めは些細に感じるそのわだかまりが、長期に渡る行動の内に致命的な決裂を生む。そんな言うなれば“相性”の問題面をクリアするために採られたのは、ヘカトンケイルの脳にまでインプラントされているサイバネティック・モジュールを利用し、別の人格を形成するという手法だった。人為的に生み出された脳内の相棒である。

しかし、それは二重人格ではない。ヘカトンケイルがエグゾスケ

ルトンの下に纏っているインターフェイスアーマーには膨大な知識と諸々の情報処理をする人工知能に準じる機能が備わっており、アーカーシャ・ガルバはそれと脳内の人格を掛け合わせたハイブリッドである。またエグゾスケルトンに備わった様々なセンサーから得られる情報もアーカーシャ・ガルバが処理し戦術支援に利用する機能から、バイオロイド単身では手に余るヘカトンケイルの全性能を有効に活用するための“役割分担”といった側面もある。

『まったく。バイオロイドってのはみんなこんなにノリが悪いのかしら。訓練所でノリ突っ込みぐらい収得させるべきね』

アーカーシャ・ガルバの人格はその基礎形成過程において、数十種類の中から使用者であるバイオロイドに一番適したものが選定される。以降はテスト調整と実際に使用していく過程で最も相応しい形に自然形成されていく。

つまりアーカーシャ・ガルバの姿や言動、思考パターンは全て同一ではなく、バイオロイドによって様々なのである。このアーシャはケイルのオリジナルなのだ。

「……」

最も相応しい形のオリジナル。正直、それについては懐疑的にならざるを得ないケイルだった。

小麦畑に沿った小路を歩いていくと、大きな尾根があり、尾根の上は墓地だった。

墓地と言っても墓石も何もない。ただ大地を掘り起こして遺体を埋葬したであろう盛り上がった土が点々と広がっている。

墓地には三人の村人の姿があった。シャベルで穴に土を放る壮年の男性と、その側で膝き両手を組んで静かに嗚咽を漏らす若い女性。おそらく親子なのだろう。

そしてまだ十歳そこそこであろう一人の少女が、血に塗れた女性の遺体を背負って歩いていた。少女よりも背が高く重いであろう遺体、垂れた爪先が地に付いている。少女の膝は加重にがたがたと嗟っているが、それでも定置に辿り着くと遺体を優しく地に横たえ、

息つく間もなく脇に置いてあったシャベルで土を掘り始めた。

ケイルは近付き、少女に片手を差し出した。

「代わろう」

少女は呆然とケイルの爪先から頭までを見詰め、しかし強く唇を結び、まるで睨むような目付きで首を横に振った。

「いや、怪しい者じゃないんだ。大変だろうから代わるよ」

ケイルはシャベルに手を伸ばすが、少女はシャベルごと腕を胸元に引き寄せ、強く首を振る。

黙って少女から離れると、先ほどの親子が埋葬を終えたのか、近付いて来た。

「あなたが村を助けてくださった方ですね」父親であろう壮年の男性が力ない微笑を浮べる。「ありがとうございます」

「いや、いいんだ」

ケイルは言いながら、隣の若い女性の鋭い視線に気が付いた。男性の娘であろう彼女は、ケイルを強く睨んでいた。

「なんで……なんでもっと早く助けてくれなかったの」

「こら！ お前はなんて事を言うんだ！」

「だって、お母さん死んじゃったんだよ！ もっと早く来てくれればお母さんだって」

「やめないか！」

父親の怒声に娘は口を噤み、村の方へと走り去った。

「本当にすいません。恩人の魔道士様に向かっでとんでもない事を」男性は頭を垂れ、目を伏せる。「母親を失ったのです。どうか許してやってください。後で言っで聞かせますから」

つまり彼の妻でもあるのだ。

「いや……いいんだ」

ケイルは同じ科白を繰り返し、穴を掘り続ける少女に目を遣る。

男性もその視線の先を窺い、小さく嘆息してから口を開いた。

「彼女も今回の襲撃で母親を失ったのです。父親も二月ほど前に魔物に襲われ、亡くなってしまいました」

見ると、少女が掘っている穴の隣には、埋葬の跡があった。父親の墓なのだろうか。

「じゃあ彼女は一人なのか？」

「はい。どこか余裕のある家があればいいのですが、おそらくどこも自分の家の事で手一杯でしょうから、彼女は一人で生きていかなくはないでしょう」

「そうか」

暫しの沈黙が流れ、ケイルは男性に向き直ると片手に持っているシャベルを指差した。

「それ、貸してくれるか？」

穴の側に立つケイルの姿を認めると、少女は再びきつい視線を向けるが、その手にシャベルが握られているのを見ると、表情から敵意が消えた。

「手伝うよ。それならいいだろ？」

「……」

少女は返事をせず、黙って穴掘りを再開する。無言の肯定なのか、追いつ返すのを諦めたのか。判断できなかったがとりあえずケイルは少女と並んで穴を掘り始めた。

ケイルの助勢もあり、一時間も掛からずに埋葬作業は終了した。

墓の側で膝き、両手を組んで黙祷する少女。ケイルはそれに倣うべきか考えたが、やめておいた。

黙祷を終え、立ち尽くして両親の墓を見下ろす少女に、ケイルは小さく問い掛けた。

「奴らが憎いか？」

露骨に不審げな表情をする少女。しかしケイルの双眸、淡く赤い光を宿す丸く貫かれた二つの穴に魅入られたように呆け、ほどなくして強く頷いた。拳を握り締め、口をきつく結んで、何度も何度も頷いた。目尻に涙を浮べているが、眉間には怒りを湛える深い皺が刻まれていた。

ケイルはしばらく少女を見詰め、何も言わずに去って行った。

少女は、優しく、奇妙で、そして恐ろしい何かを孕んでいるような異形の者の後姿を視えなくなるまで目で追っていた。

5 害獣駆除

『オオカミ。ネコ目イヌ科イヌ属に属する哺乳動物。雌雄のペアを中心とした社会的な群^{バック}れを形成する。群れは雌雄別の順位制を伴い、通常は繁殖ペアが最上位である。最上位から順にアルファ、ベータと呼び、最下位の個体をオメガと呼ぶ——ばーい、ウィキペディア。便利な世の中になったわねー』

「……お前、時々わけのわからない事を口走るよな」

ケイルは森林を進んでいた。

鬱蒼とした道なき道を、注意深く周囲を見渡しながら、それでも素早くひた進む。ただ彷徨っているわけではなく、直線的に、競歩に近い速度で、若干の拓けた土地に出たら駆け足で、急ぎで何かを追っていた。

「雨が降らなかったから大丈夫だと思っではいたが、その安心すら杞憂だったな。歩く広告塔だ」

『そりやそうでしょ。獣は痕跡なんて意に介さない。だから獣道つてのができるのよ』

ケイルが往く前方には、注視しなければわからないほどの、しかし然るべき者が見れば露骨過ぎるほどの何者かが移動した痕跡が残っていた。不自然に露出した腐葉土、倒れた草、折れた枝、そして人間大の足跡。

土の上に深く残った足跡の大きさは人間のものと似ているが、形は全く異なる。極端に減り込んだ踵の部分、指の数、その指から伸びる長く鋭い爪。つまり狼男の足跡である。

昨晚、ポルミ村を襲う狼男の群を屠った時、最後の一匹を逃してしまった。それが残した痕跡を狩人よろしく追跡しているのだ。

両親を失った少女と別れた後、ケイルは村の外に遺棄した狼男の

死骸のところに再び戻った。そして死骸を調べ、ある仮説に至った。狼男の群はまだ存在する、というものだ。射殺した狼男の中が一番大きな個体は雄だった。雄のアルファである。そしてその中には雌の死骸もあったが、どれも雄のアルファと比べると身体の小さな個体ばかりであった。つまり雌のアルファと思しき個体がいなかったのだ。その事から、ポルミ村を襲ったのは云わば狩りに出てきた者達であり、その帰りを待つ雌のアルファ率いる群が近くに存在しているのではないか、と考えたのである。

当然、仮説の域は出なかった。もしかしたら雌のアルファは身体が小さく、あの死骸の中にあつた雌がそうなのかもしれない。そもそも相手はオオカミではなく、狼男である。ケイル達の世界のオオカミの生態が、こちらの世界の狼男に当て嵌まるとは限らないのだが、こうして痕跡を追跡している内にその仮説は信憑性を帯びてきた。痕跡から判断するに狼男は右往左往と敗走しているわけではなく、真っ直ぐにどこか明確な目的地へと向かっているのだ。つまり群の元へと逃げ帰っているのだろう。

『でもさ。狼男の雌っておかしくない？ 狼女になるんじゃないの？』

「面倒臭い事いうなよ。区別する必要はないだろ」

『人狼^{ワウルフ}っていう便利な言葉もあるのよ』

「じゃあこれからはそう呼ぶか？」

『……いや、やっぱりやめましょう』

「なぜ？」

『だってなんかカッコいいじゃん、人狼。生意気よ。ム力つくですよ』

している内に、前方に洞窟が現れた。周囲を藪と灌木の茂みに囲まれた、巨大な岩と岩が折り重なりその隙間に生じているような洞窟だ。追跡してきた足跡はその中へと続き、周囲にも無数の狼男の足跡が入り乱れていた。

「あれが巣というわけか」

ポルミ村を出てから二時間ほど、アーシャの精確な距離測定にして十七・四キロだった。数日間にも及ぶ追跡行脚も覚悟していたケイルは（だからこそ急いでいたのだが）その近さに拍子抜けすると同時にポルミ村の脅威がまだ去っていない事を確信する。

『感知範囲には熱源はなし。結構深いみたい』

「中は狭そうだな。レイピアには不向きか」

言つて、ケイルは小銃を背に固定し、左胸に装着されていた鞘からナイフを引き抜いた。刃渡り二十三センチ、肉厚で柄のヒルト高いフアイティングナイフだ。艶を消した刀身はまがまが禍々しい黒色。

『余裕ねえ。M7H拳銃もあるでしょう』

ケイルは右大腿部に巻きつけたホルスターに収まっている大型拳銃をちらりと見遣った。

「これは弾数に限りがある。レイピアみたいに弾丸を自動生成つてわけにもいかない。節約だよ」

アーシャはひひ、と嫌らしく笑う。

『それにアバドンが相手じゃナイフなんて使う機会なかったもんね。試し斬りには丁度良いかも』

「始めるぞ」

『りょーかい。タイム・トゥ・ハント。狩りの時間ね。で、どうする。サポートは必要？』

「必要ない。逃げそうな奴がいたら教えてくれるだけでいい」

ケイルは洞窟に足を踏み入れた。

自然の洞窟だ。人が二人辛うじて並んで通れるほどの広さでしかなく、場所によっては身を屈めたり、樹々の根を掻き分ける必要があった。そして無論光源もない。

ケイルはマスクの暗視装置ナイトビジョンを起動。スターライトクラスと呼ばれるそれは、その名の通り僅かな星の光でさえも数万倍に増幅し、明確に見通す事ができる。更にパッシブ遠赤外線可視装置、エグゾスケルトンの各種センサー、それにインターフェイスアーマーの演算能力も併用され、ナイトビジョンを介した視界は元来のモノクロな

ものではなく、色合いまで帯びている。暗闇であるのに太陽に照らされた只中を視ているような第五世代のナイトビジョンだ。ちなみに、ナイトビジョンは幾多もの安全装置を備えているので漫画や映画で頻出するような突然強い光を浴びて故障したり目が潰れる事はない。

不意に、前方の曲り角の先からギャンギャンと、色めき立つような複数の鳴き声が聞こえ、狼男が飛び出してきた。その数は三匹。両手とその先の鋭い鉤爪を一秒でも速く獲物に突き立てられるように前に押し出して、大きく開けた顎からは涎と舌がだらしなく垂れている。狭い通路で押し合い圧し合いをするように我先にとケイルに迫る。

『あら、かわいい。狼男まつしぐら。腹ペコみたいね』
「ふん」

ケイルは左手を前に、ナイフを握った右手を身体に引き寄せる。早い者勝ちに勝利した一番手前の狼男の顎に向かって、下から挟り込むように繰り出した。

「これでも喰らってろ」

顎の下から突き刺さったナイフの刃は、下顎を貫通、さながらアッパーカットを受けたかのようにガツンと口が閉じられ、刃の切っ先は脳にまで達した。頭部を串刺しにされた狼男は白目を剥き、噛み締められた鋸刃の間から、鼻から、顔面のあらゆる穴から黒い血が迸る。

ケイルはナイフを引き抜き、それに伴い倒れる狼男のすぐ背後、腕を振り上げる左側の狼男の喉と胸を刺す。疾く、そして深く。そのコンマ五秒にも及ばない刺突で心臓と頸動脈を断ち切られた狼男は地に伏す前には絶命した。

右側の狼男が獰猛な呻り声を上げてケイルの両肩を掴んで押し倒そうとするが、まるで根を張ったようにケイルの足は大地から離れず、微動だにしなかった。

「触んなよ」

鬱陶しそうに呟くケイルは狼男の顎を掴み、壁面に叩き付ける。

土ではなく岩の洞窟である。頭部が衝突した壁面には赤い血糊が放射状に広がり、止めのダメ押しとばかりにナイフが側頭部に突き立てられた。壁面に^{はりつけ}にされた狼男は小刻みに痙攣する。ナイフが抜かれると力なく崩れ落ちた。

三匹の狼男が現れてから屠るまでに要した時間は、五秒にも満たない。

ケイルは死骸には一瞥もくれずに息つく間もなくひた進む。いや、この程度の殺陣でヘカトンケイルに息をつく間など必要ない。

「奴ら、暗闇の中なのにどうして見えるんだ」

『大抵の獣に言える事だけど人間よりも目も耳も感度が優れてるんでしょ。そして何よりイヌ科イヌ属には嗅覚がある』

「嗅覚なんてこの臭いで麻痺しそうなもんだけどな」

洞窟の中は暴力と言えるほどの悪臭に充ちていた。狼男自身の獣臭は勿論、そこに散らばる糞尿や動物の白骨の腐敗臭が加算されている。人間のものと思しき頭蓋骨も転がっていた。その悪臭は奥に進むにつれ強く、酷くなっていく。

ほどなくして狭い通路は拓け、天井の高い十畳ほどの広間に出た。洞窟の終点である。

そして幾重もの低く重い呻り声が響き合い、木霊し、あたかも地鳴りのように鳴っていた。

狼男、狼男、狼男……。その広間には九匹もの狼男が所狭しと犇めき合っていた。

大きな個体から、人間の子供程度の小さな個体まで、全ての狼男が牙を剥き、眉間に深い皺を刻み、爛々と金色の瞳を輝かせていた。その殺意と食欲はケイルただ一点に向けられている。

『ビンゴ。随分大所帯な狼の群^{ウルフバック}だったみたいね』

「ああ。……そしてアレが雌のアルファか」

ケイルの視線の先、群の一番奥には一際大きな個体が居た。三メートルはあるかという大きさである。村を襲った一番大きな個体、

雄のアルファを優に凌ぐ巨体だ。腹部が異様に膨らんでおり、子を宿しているのだろう。間違いなく雌だ。

『でかつ。もはや怪獣ね。私達の世界のオオカミは概して雄のアルファの方が大きいはずなんだけど、狼男には当て嵌まらない生態だったみたい』

「それよりも俺はアレがどうやってこの洞窟に入ったのか気になるんだが……」

『細かい事を気にするんじゃないわよ。きっとこの中に入ってから育ったのよ』

「じゃあどうやって出るんだよ。ここで生涯を終えるのか？」

『こまけー、細か過ぎるっ。女にもてないわよ』アーシャはうんざりするように言うが、すぐに口調を引き締めた。『お馬鹿な事言ってる内に、来るわよ』

ケイルはナイフを構え、前に出した左手で挑発的に手招きをする。「来いよ。害獣駆除だ」

言語を解さない狼男であるが、ケイルの言葉を受けて激怒したかのように咆哮を轟かせ突進してきた。

雪崩のような全周からの強襲を、ケイルは真正面から受け止める。伸び迫る腕を切断し、喉を切り裂く。

体当たりを躲して、がら空きの背を刺突する。

振り下ろされる鉤爪をナイフで受け止め、そのまま強引に振り抜いて指を落とす。

ケイルの大腿部に噛み付く小さな個体は、その装甲の硬さに文字通り歯が立たず、振り落とされた拳骨に頭骨を砕かれる。

二匹の狼男に組み付かれるが、鉤爪はがりがりどと装甲の塗装を剥がすだけで、すぐに振り払われ、倒れたところにケイルの足が振り下ろされる。頭は西瓜のように簡単に潰れ、血と内容物が地に拡がる。

ケイルは倒れたもう一匹の脚を掴むと軽々と持ち上げ、前に後ろにと、何度も床に叩き付ける。その度に骨は折れて砕け、身体は鞭

のように伸び撓る。さながら遠心力分離機の如く大量の血飛沫が四周に散り、飽きると壁に投げ付けた。転がる狼男の骸は、比喻や誇張なく檻褸^{ぼろぞうきん}雑巾のようであった。

残るは一匹。雌のアルファ。

『さて、ラスボス、ビッグママのお手前拝見ね』

人型とは言え、所詮は獣。目の前で瞬く間に虐殺された家族に心痛するでもなく、相手に恐怖するでもなく、喉を鳴らす獰猛な呻りと見開いた目の中心の瞳は食欲とそれを満たすための前作業、殺意に溢れていた。

「良い目だ」ケイルはナイフを振り、血を掃ってから鞘に収めると、徒手空拳でファイティングポーズを採った。「敵はそうでなくちゃいけない」

その声色は不敵で、嬉々としている響きさえあった。

劈くような吠えと同時に、両腕を広げて疾駆してくる雌のアルファ。その足音は連続する地震のようだ。

ケイルは身を低くして腰を捻り、握り固めた右手の拳を腰の辺りで構えた。途端、風船を絞るような奇妙な音が腕から漏れ、腕全体が僅かに膨らんだ。腕を覆う合成金属装甲板の隙間が微かに広がっている。

ケイルの腕の筋繊維の収縮をそれに埋め込まれたサイバネティックス・モジュールが感知し、強化衣服の人工筋肉に同様の電気信号を送ったのだ。つまり力を籠めろ、と。それにより飛躍的に向上するケイルの身体能力は人間を、人外の狼男ですら超越する。

このように外的にもその作用が顕著に見て取れるほどになると、もはやその威力は――

一メートルに迫った雌のアルファ。その腕が挟み込むようにケイルを左右から襲い、鉤爪がケイルの頭部に十センチと迫った瞬間、それは放たれた。

『しょーりゅーけん』

アーシャの間の抜けた声が刹那の静寂に響く。雌のアルファは宙

を舞っていた。その頭部は、下顎が付け根から消失していた。単純明快な暴力をぶつけられた下顎は肉片と化し弾け飛び、鋭い犬歯やその破片が米を撒いたかのように散っている。足元には、右の拳を天に向けて振り切ったケイルの姿があった。

そして雌のアルファが落下する前に、ケイルは素早くナイフを抜刀、落下する重力と上に振り上げる力、二つの力点を得た鋭い刃で股から腹部、胸部、喉にかけて、掻っ捌いた。半月のような血飛沫が虚空を彩る。

雌のアルファは鈍い音を伴い墜落するが、それには生々しく瑞々しい音が混じっていた。真っ直ぐに裂けた腹部からは血液だけでなく、まだ体毛も生え揃っていない三匹の胎児が羊水と一緒に流れ出る。

『ひひっ。強制帝王切開、リアル赤ずきんちゃんね』

「これでクリアだな？」

『ええ。熱源反応なし。オールクリア。親類縁者皆殺しって感じ』

「犬のお巡りさんでも呼べばいい」

再び血を掃おうとケイルはナイフを振り被るが、ふと途中で止まり、おもむろに雌のアルファの頭部の側で屈み込んだ。

ケイルの作業を眺めながら、アーシャは不気味に嗤う。

『随分悪趣味なお土産なこと』

6 もて成し

日が頂点に達しつつある頃。

ポルミ村の中心にある井戸の周りには十名近い大人達が集まり、話し合っていた。最初は水を汲みに来て偶然会った二人が話していたに過ぎないのだが、それが一人、また一人と増えて、いつの間にか大規模な井戸端会議の様相となった。

約半年前に村長とそれに準ずる男達が魔物の襲撃で亡くなってしまっただけから、このような突発的であり偶発的な会合が村の総意を決める場となっているのだ。

議題は主に被害状況の確認と被害村民の処遇について。狭い村なので被害の全容はすぐに把握できたが、被害村民の処遇となると皆が視線を落として閉口した。魔物の襲撃直後の会合ではお馴染みとなってしまった光景だ。

被害村民とはつまり身寄りを失い自活が難しくなってしまった孤児や老人だ。傷病は時間と手間を掛けてでも無償でサイが治癒させてくれるのだが、自給自足で成り立っているポルミ村は五体満足というだけで生きていけるほど甘くはないのだ。日々の雑事から農作業までこなさなければならぬ。経験のない幼い子供や労働が困難な老人には難しい。

食事や作業の手伝い等、若干の援助で生活できる者はいいが、それも適わない者にはどうしてやる事もできない。ずば抜けて裕福な家などあるはずもなく、新たな家族を迎入れるほどの余裕はこの家庭にもないのだ。

そういった者は村を出るしかない。親類縁者が余所の集落に居る者はそれを頼りに、そうでない者はとりあえず王都を目指して、魔

物の領域たる森へ踏み入る事になる。言わずもがな、自殺行為以外の何物でもない。過去に村を出て行った者達がその後どうなったのか誰も知らないが、知らせがないのは無事な証拠といった平和ボケの常套句が当てはまるわけがないのは想像に難くない。

そんな暗澹あんたんとした雰囲気のまま自然消滅するのが会合の通例だったが、今回に限り議題は次へと移行した。ケイルについてだ。

彼は全体何者なのか、という推測で場は徐々に盛り上がる。

王都の兵士か。いや、あんな鎧は見た事もない。では他の国の者か。例え他国の者でも強力な魔物の群を単身で葬るほどの強者ならば噂が聞こえてこないはずがない。誰何したら説明できないと言葉を濁していた。何か事情があるのだろう。あの医療技術は心得がある者に違いない。優しく丁寧に治療法を教えてくれた。埋葬を手伝っているのも見た。処理に困っていた魔物の死骸を森に移してくれたのも彼だ。魔導士である事は確かだ。奇妙な杖を向けた瞬間、魔物の頭が弾けていた。

ケイルの所行を目撃者が語る度に驚嘆と歓声があがる。そんな普段は見られない賑わいに更に村人が集まり、最終的にはポルミ村の人口の過半数が集った。皆が見慣れぬ姿をした村の救世主に興味津津なのだ。興味を持つと言う方が無理だろう。しかし、結局ケイルの正体にこれといった結論を導くには至らなかった。

とにかく出来る限りのもて成しと謝礼を用意するべきだという方向に話が纏まり、役割分担が決められ、村が俄にわかに慌ただしくなってから暫くして、大あくびをして後頭部を掻くという如何にも寝起きであるサイが家から出てきた。

妙に騒々しい村の様子を訝しみ、最寄りの者に事情を訊いたサイはぽつりと宣った。

「ふうん。で、主役のケイルはどこよ？ 家に居ないんだけど」

その一言で騒々しさはがらりと色合いを変える。村総出での大搜索である。しかしいくら探しても村の中にケイルの姿はない。

そして再び井戸端会議。

サイの管理不行き届きが非難され、サイは鬱陶しそうに反論し、もう村を離れてしまったのか、と落胆し始めた時、森から近づく人影に誰かが気付き、その姿を認めると皆が目を見開き呆けたように口を開け、まるで時が止まってしまったかのように固まった。

「……何かまずかったか？」

村人達の徒ならぬ反応を受けて、ケイルは足を止めた。

そして右手にぶら下げていた物を投げ捨てる。村人の視線はケイルから離れ、縫い付けられたかのように無造作に転がるその物を追う。それは狼男の生首だった。人間の頭部三つ分はあろうかというほど大きく。下顎が欠損している。雌のアルファの生首だ。頭部を一見ただけでその巨体を想像するのは難くなく、それほどの大型の魔物を目にした者は村人には一人も居なかった。

「……あんた」サイが歩み出て、ケイルをまじまじと凝視する。「一体どこで何してたんだい？」

「いや、この村を襲った魔物の巣を駆除してきたんだが」

「駆除って……。で、ソレは？」

生首に視線を移すサイ。

「親玉の首だ。とりあえずこの魔物に関してはもう心配ないだろう」時を取り戻した村人達がざわめき始める。「魔導士様」だとか「救世主様」や「英雄様」という言葉が口々に囁かれ、畏怖や崇高や矚若^{じゅくじゃく}が入り混じったような不思議な眼差しでケイルを見詰めていた。サイは微笑してから村人達の方へ振り返り、声を張った。

「みんな！ なにぼーっと突っ立てるんだい！ 救世主様をもて成すんだろ！ さあ、動いた動いた！」

村人達が再び準備に駆け出した。常にどこか物寂しい雰囲気で閑散としていたポルミ村は、今や書き入れ時に活況する市のような賑やかさを帯びている。

立ち尽くしていたケイルは「準備が終わるまで待っている」と、再びサイの家へと導かれる。

その道すがら、ケイルはサイに尋ねる。

「準備つて、何を準備しているんだ？」

サイはきょとんと目を丸くして、不意に顔を綻ばせ爆笑し始めた。
「あ、あんた、本当にわかってないのかい。冗談なら傑作、本気ならなお傑作だよ」

声も絶え絶えにケイルの背中をぺしぺしと叩くサイ。

ケイルは訝しみながらも素直にサイの家で待つ事にした。

小一時間ほど待つてから呼ばれたケイルは、サイの家を出て、再び立ち尽くしてしまった。

村中央の井戸周囲の広場には麦藁で作られた敷物が敷かれて、その上には大量の葡萄酒や色取り取りな料理が山盛りになった大皿が無数に並べられていた。そして井戸端会議の時よりも更に大勢の、この狭い村にこれほどの人口が居たのかというほどの村人達が総出でケイルを迎えた。その顔色は崇拜や尊敬や単純な笑顔や、料理と同じく様々だったが総じて好意的なものだった。

「どうぞこちらへ」と恭しく敷物の中央に案内されて、着座を促される。村人達はケイルを取り囲むように円周に座った。

「へえ、中世ヨーロッパ風でありながら、地べたに座る習慣もあるのね」

アーシャの声。当然、村人達には聞こえない。

「それよりも何が始まるんだ？」

「えー。この期に及んでもまだ想像できないわけ？」アーシャは嫌味げに嘲笑する。『お約束の英雄様のもて成しでしょ』

そしてケイルの正面には村では一番の年配者であろう三人の老人が座した。一人は脇に小箱を抱えている。

「魔導士様。まずは村を代表して懇親の感謝を申し上げます」

三人は息を合わせて一礼した。

「村を窮地から救ってくれたばかりか、傷病者への手厚い救護、埋葬まで手伝ってくれたとの事。そればかりか自ら魔物の巣窟へと単身で乗り込み仇まで討っていたたくとは、ポルミ先祖代々の名の下にいくら感謝の言葉を重ねても足りませぬ」

別の老人が小さく一礼してから、言葉を継いだ。

「なにぶん貧しい村でして、この程度のもて成しと感謝の印しかご用意できません事、ご容赦ください」

そして地に置いた小箱をケイルに差し出す。

「……」

周りからの息を飲むような雰囲気若干気圧されながら、ケイルは箱を開けた。

中には数枚の金貨と数枚の銀貨、数十枚の銅貨、この世界の通貨なのだろう。それと宝石や指輪や首飾りが所狭しと収まっていた。

ケイルは何気なく周囲に視線を遣る。今朝目にした時には控えめながらも装飾品を身に着けている女性が数名居たが、今はどの女性を見ても指や首元に目を引く彩りはなかった。彼女達が感謝の印として自らの装飾を差し出したのは明らかだ。

ケイルは静かに箱を閉じ、老人達の方に押し返すと首を横に振った。

「これは受け取れない」

村人達の空気が凍り付いた。ケイルは知る由もないが、村人達は内心不安だったのだ。どこか遠い地では高名であろう偉大な魔導士様に、この貧しい村で用意できる最大限の謝礼程度で満足いただけなのか、と。喩えケイルが高名でなく偉大でもないどこかの傭兵だったとしても、村が受けた恩は計り知れない。その恩に応えられるだけの謝礼を出せるのか、と。

つまりケイルの言葉を、これじゃ足りない、という意味に取り違えたのだ。

蒼白な表情をした老人が震える声を発した。

「お、畏れながら申し上げます。大変申し訳ないのですが、この謝礼がこの村で用意できる精一杯。こ、これ以上と申しますともう手立ては……」

「ん？ いや、だからこそ受け取れない」

「し、しかし、これ以上は……」

「いやいや、だから知らない」

勘違いした老人とケイルの会話を全く噛み合わず平行線を辿る。事情を知って客観的に見たら滑稽でさえあった。事実、ケイルの常識の枠に収まらない特殊性を若干ながらも察しているサイだけは、ケイルの背後で含み笑いを漏らしていた。

「あのさあ」そのショートコントを見飽きたのか、サイが立ち上がった。「足りないんじゃない、知らないって言ってるんだよ、ケイルは」

村人達は目を丸くする。彼らには、然るべき働きをしたのに出された謝礼を受け取らないという意味が理解できなかった。

「は……？」老人は見開いた目をサイからケイルへと移す。「知らない、とは？」

「別に頼まれてやったわけじゃない、俺が勝手にやった事だ。それに報酬を求めていたわけじゃない」

「で、ではなんのために？」

その問いにケイルは事も無げに答えた。

「あんた達が困っていたから手を貸した。魔物達を憎んでいたから排除した。俺はそれが出来たからそうしたまでだ」

だからこれには必要ない。元に持ち主に返してやってくれ、とケイルは更に箱を押し返す。

暫しの沈黙が流れる。

「あ、あなたは」

老人が口を開いた。

「純粹な善意でこれほどの事をしてくれましたと言っているのですか？ それに対する我々の謝礼ですら、本意から必要ないと仰るのですか？」

なぜこれほどまでに驚かれるのか、いまいち理解できないケイルは曖昧に頷いた。

「あ、あなたは神なのですか？」

しかしその言葉にはケイルは強く否定の意を顕わにする。

「神じゃない。それに英雄でもないし、魔導士でもない。ケイルと

呼んでくれればいい」

力を持つ者がそれ相応に振舞うのは自然であり当然である世界。魔物の出現以降は数が減ったが、それでも不定期的に訪れる王都の兵団には心からのもて成しと税を要求され、彼らの横暴な振舞いに多少の反感は覚えても当然の事であると諦観していた村人達は、生まれて初めて本物の慈悲と謙遜の心を持った力ある者をその眼に視た。子供に聴かせる有り得ない英雄物語、現ではない夢物語、それの主人公が今、目前に居る。

「なんという……」

それ以降継ぐべき言葉を失い、老人達は深く深く頭を下げた。村人達も自ずとそれに倣う。両手を組んで涙を流す者も少なからず居た。

感謝する必要はない、と伝えたかったケイルだが自身の発言が真逆の効果をもたらしてしまい、居心地が悪そうに身動ぎした。

そしてそれからは大宴会だった。青空の下、敷物の上で催される宴会はさながら花見のようだ。皆が陽気な表情で葡萄酒や料理を口に運び、談笑していた。その話題のほとんどがケイルの美談である。自身で歩ける比較的軽症な傷病者の姿もある。今だ大勢の傷病者が詰めている大きな家屋にも料理と葡萄酒が運ばれ、ケイルの英雄譚が語られた。

一見すると祝賀会のようであり、まるでめでたい席かのようなだが、穿った見方をすれば昨晚村を襲った悲劇を忘れようと一時の喜びを努めて謳歌しようとしているようにも見えた。

ケイルは空腹を感じていなかったが、それでもマスクを外して申し訳程度に料理に手を伸ばす。周囲を若い女性が囲み、ケイルが木製のコップを持ち上げ一口でも葡萄酒を含もうものなら、間髪容れずに葡萄酒を注ぐ。彼女達は例外なく微熱に罹ったかのように頬を染め、どこか虚ろな瞳でケイルを見詰めていた。その中には今朝墓地にて、父親と一緒に母親の埋葬を行っていた女性の姿もあった。ケイルを罵った彼女でさえ、今では恥ずかしそうに頬を朱に染め、

葡萄酒を差し出してくる。

まったく落ち着かない。

『ハーレムきたこれ』

アーシャの言葉に舌を打ちそうになるが堪える。

そんな彼の前には次から次へと村人が現れ、感謝の口上を述べた。先ほど断ったのに、それではどうしても気が済まないと言品を渡そうとする者も居た。あまつさえ一晩の妾でもいいから家の娘をどうか、と着飾った娘を連れてくる露骨過ぎる者も居る始末。その度にどのように断ったら傷付けずに済むかと、ケイルは気を揉んだ。

ほどなくして村人達による謁見が終わり、落ち着いてきた頃、サイが葡萄酒片手にケイルの横にどかりと座った。

「やあ、大人気だね」

「……こんな事をして、村の貯えとか大丈夫なのか？」

「おいおい、あんたが心配する事じゃないだろ。みんなだつて馬鹿じゃない。村の今後を考えて出来る限りのもて成しだよ。もうすぐ収穫の時期だからね。このまま順調に行けば問題ないよ」

「それにしても、ここまでしてもらつてなんだか申し訳ないな」

「あつは。こつちの科白さね。村にここまでして貰ったのにこの程度のもて成ししか出来なくて、むしろこつちが申し訳ないよ。だからせめて愉しんでおくれよ」

葡萄酒をボトルごと呷るサイ。満足そうに村人達の顔を見渡していた。

「ああ、そういうば」ケイルはふと思ひ出した。「何か俺に頼みたい事があるとか言つていなかったか？」

サイは意味深げにケイルの顔を覗き込み、ふうと息を付いて微笑した。

「一つは、もう解決しちゃったよ。実はあのタイプの魔物が群で巣を作るのを知つてたからさ、その討伐を頼みたかつたんだ。ただど起きてみたらあんたが親玉の首を持つて現れた。あんた風に言うなら駆除だつて」

広場の外、狼男の雌のアルファの巨大な生首の方に視線を移すさい。

「そうか。しかしその言い方だとまだ頼み事があるみたいだな」

「ああ……」

サイは生首の方に視線を固定したまま生返事をする。ケイルもそちらを窺うと、一人の少女がしゃがみ込んでいた。それは今朝、ケイルが母親の埋葬を手伝った少女だった。

最初は村人が集まり物珍しげに眺め、子供達が棒切れで突いていた生首だが、すぐに興味は宴会に移った。今は一人の少女が腰を降ろして、まるで見詰め合うかのように生首の双眸をじいつと凝視していた。その顔は能面のような無表情だった。

少女は立ち上がると、賑わう広場の中央、ケイルに視線を移した。

「……」

距離を置いて重なり合う視線。

しかし不意に視線を切り、一軒の家屋に走り去ってしまった。

「ま、誰も彼もが陽気に振舞えるわけじゃないさ」

サイの弁護するような言葉。ケイルは黙って少女が入った家の方を見ていた。

馬の蹄が地を打つ軽快な音。しかしそれが地揺れを思わせるほどに無数に響くと、聴く者に徒ならぬ不吉を思わせる。そんな不吉の群が向かう先は、森林の拓地にぽつりと在る閑散とした村、ポルミ村だった。

7 賊搜索

ライアス・アクエ・ハイントン百人隊長は馬の手綱を握りながら何度目になるかわからない嘆息を吐き出した。

一騎の騎馬が不意に前列から横に飛び出して、路肩に馬を止めたのだ。その馬上では溜息の原因の代表格たる男、バリーガ分隊長が振り返り、嘲笑顔で隊列中央のライアスが達するのを待ちかまえている。それにより僅かに隊列が乱れるがバリーガはそんな事意に介さない。

進んできたライアスと並ぶと、バリーガは当然のように馬の腹を蹴りライアスと併進する。そしてそれが権利であるかのように口を開くのだ。

「なあ、隊長。今回の任務、本当に賊の搜索なんすか？」

敬意も何もない馴れ馴れしい言葉遣い。もし仮に竹馬の友同士であろうとも指揮官たる百人隊長に対して分隊長如きが『なあ、隊長』なんて、厳格な軍では有り得ない。

「……僕はそう聞いている」

しかしライアスは沸き上がる溜息を飲み下して愚直に応えるのだった。

「僕はそう聞いている、ねえ。その聞かされた話をそっくりそのまま信じてるんですかい？ ほら、これが見えないわけじゃあないでしょうや」

バリーガは一度手綱を放して舞台俳優のように大仰に両手を広げ、ライアスの前後を示すように振った。

百人隊長のライアスを中央に、百名からなる騎馬隊が縦に列を成して、森林に囲まれた小径こみちを前進している。

バリーガが何を言わんとしているか、嫌というほど察しているライアスだが、黙してバリーガの二の句を待つ。

「百人の騎馬隊ですよ、百人。ちよつとした城塞なら落とせるぐらいの戦力ですぜ。でも、俺の聞いた話じゃあ、なんでも賊はたったの一人だそうじゃないですかい。大規模な盗賊団が相手でも百の騎馬隊なんて大袈裟なのに、たった一人の賊に一体なんだってこれだけの兵士が出張らなきゃならないんです？」

正直、それについてはライアスも怪訝に思っていた。大隊長から命を受けた時には耳を疑った程だ。当然、ライアスもその際にバリーガ同様の疑問を口にしたが、大隊長から返ってきたのは当たり障りのない、ある意味では理に適った、しかしよくよく考えれば矛盾を感じる応えだった。それは大隊長自身も知らないか、あるいは百人隊長以下の下士官には知らせないように達しが出ているという事だ。

ライアスは大隊長が口にした言葉を、ほぼそのままバリーガに伝える。

「最初に知らせた通り、今回の任務は遠征になる。その道程には当然、魔物の出現も予想される。魔物との戦闘で消耗し本来の賊搜索という任務が継続不可になる懼れを考慮した結果、百名という規模が妥当であると決定されたのだ」

王都デリトから賊搜索のために出立した騎馬隊は四つ。四つ全てが百名の規模である。王都から周辺の村や街へと四つはそれぞれ別の方角に進行し、目ぼしい各所で搜索と聞き込み調査を行い、定められた終点に達したら引き返すという作戦概要だった。その四つの騎馬隊にはそれぞれ一番最初に到達する事になる最寄の村や街の名が名称として宛がわれている。ライアス率いる騎馬隊の名はポルミ搜索隊。王都からほど近いポルミ村が最初の搜索地点なのだ。

何事もなく進行したとしても終点である港町のマルアインに到着するまでの予想日程は一月。往復で二月という長期間の搜索行脚だ。十分遠征と言え得る距離である。

ライアスが喋っている途中から既に小馬鹿にしたような嘲笑を浮べていたバリーガは、ライアスが言い終わると同時に、へっ、と鼻を鳴らす。

「だから、その聞かされた話をそっくりそのまま信じてるんですかい？　そもそも魔物との戦闘を想定するなんて、根本からしておかしいでしょうや」

バリーガの言う通り。ライアスが大隊長の返答に感じた矛盾はまさにそこだ。

過去を振り返っても少数の賊搜索に使用するのは駿馬を駆る一分隊、つまり十名程度から成る少数精鋭の騎士隊が妥当であり、魔物との戦闘を一切避けて搜索活動にのみ重きを置くのが常道だ。それに比べて大規模戦闘を想定した百もの雑兵隊列となると進行速度がどうしても鈍重となり、魔物との戦闘を避けるのは難しい。そんな不必要な危険を鑑みてまで通常の十倍の百という兵を出した上の考えに首を傾げざるを得ない。

ライアスには、たった一人の賊に対して、王国的に失っても痛手にならない程度の最大戦力を動員しているように思えるのだ。

「で、我らの百人隊長様はそこんとこどう考えてらっしゃるのかと、このバリーガ分隊長めは賤しくも意見を頂戴したいわけですよ」

慇懃無礼極まりといった言葉遣いで訊ねてくるバリーガ。

隊を指揮しなくてはならない立場にあるライアスとしては、上への不審にも取られ兼ねない自分の考えを曝け出したり、不思議だね、何でだろうね、と気安く語らうわけにはいかない。

故にライアスは精一杯の威厳を籠めて、

「……う、上の指示に不満か？」

と若干うわずった声で言うのだった。

バリーガは締めりのない嘲笑顔を更に不愉快に歪めると、肩を竦める。

「いいいえ。そんな恐れ多い事はありませんでせ、はい」

そして強く馬の腹を蹴り、土埃を盛大にライアスに浴びせながら

隊列に戻るのだった。

ライアスは咳き込みながらバリーガが割り込むように這入っていた前列を窺う。何人かの兵士がバリーガと談笑し、そしてライアスの方を見遣り、再び談笑している。いや、嘲笑だ。

盛大に嘆息しながらライアスは悔いる。

なんだって僕がこんな目に、と。代々から名門の軍家として国王に仕えてきた貴族ハントン家。そんな家柄では稀で不似合いな人一倍温和な性格のライアスは、自分は軍に向かないと思いながらもそんな我が儘が許されるはずもなく、不承不承ながら軍の士官教育所に入り数年にも及ぶ長く苦しい教育課程を経て、百人隊長下級士官の称号を賜ったのがつい先々月。教育所と言えどそこは既に軍の一部であり、戦闘訓練の一環として魔物との実戦に参加した事も何度があるが、百人隊長として兵を率いるのは今回が初めてだった。

そして今回率いる事になった兵卒の中には、実に厄介な者達が混じっていた。バリーガの分隊だ。

バリーガ含めて八名からなるバリーガ分隊は、数多もの実戦を経験したベテラン部隊だ。魔物との戦闘だけでなく、絶えてから久しい他国との戦争にも参加した事があるという。見た目からしても如何にもな、むくつけき壮年の男達であり、地肌や愛用の武具にある無数の創が歴戦の猛者である事を証明している。

平民の出身でも類稀なる武勲を挙げれば軍の階級だけでなく身分の昇進も約束される、所謂叩き上げ制のあるライガナ王国に於いて、なぜ歴戦の彼らが昇進する事もなく兵卒に甘んじているのかといえば、その理由は一言に尽きる。素行の悪さだ。上官に対する不審、不服従、暴言。国民に対する横暴な振舞い。通常であれば処分されて然るべきだが、そこは歴戦に従事したという少くない功績がある。処分されない代わりにうだつも上がらないという政治的取引にも似た妥協的な軍上層部の決定が裏に在り、それにより困るのは現場、つまりライアスのような下級指揮官だった。

とどのつまり、ライアスはバリーガ分隊の面々に舐められている。

舐められていると知りつつも、弱気であり新米であるライアスには強く出る事ができない。百人隊長になっただけでいきなり二ヶ月間にも及ぶかもしれない搜索任務を命じられただけでげんなりするほど嫌なのに、それを自分を舐めた兵卒と共に行わなければならないとなると、もう泣きたい気分だった。そしてそれがライアスに溜息ばかりを量産させるのだ。

鬱々としていたライアスは、前方から逆走してくる蹄の音にどきりと顔を起こした。

しかし前から近付くのはバリーガではなく、隊列から少し距離を置いて先行していた斥候要員だった。

「ライアス百人隊長へ申し上げます」

丁寧な口調で告げる斥候要員の兵士。

バリーガのような半成らず者の部下ばかりではない事を思い出したライアスは僅かに勇気付けられた。

「前方にポルミ村が見えてまいりました。いかが為されますか」

「そうか。このまま進み、村民に聞き込みだ。王都にほど近い田舎の村に賊が足を止めたとは思えないが、警戒は怠るな」

「はっ」

再び最前へと馬を駆る兵士の背を見ながら、ライアスは今晚の野営はポルミ村に協力を仰ぐか、と思案を始めた。自身で警戒を怠るなと指示していた癖に樂觀しているライアス。

その樂觀は数分後に打ち砕かれる事になる。

ケイルは不意に立ち上がり、村の外、森林の方向を見渡した。そして森林の中に伸びる小路に視線を固定する。

怪訝に思った村人達もそれに倣い、ほどなくして皆の耳にも馬の蹄が地を打つ音が届き始めた。その聴き覚えのある音に村人達は愉しげだった雰囲気を一変、陰鬱とした面持ちとなった。

「王都の兵だ……。また税の徴収なのか」

「前回からまだ三月と経ってないぞ。魔物の所為で不定期になるのはわかるが、回数が増えるなんておかしいだろ」

「収穫だつてまだなのに、一体何を徴収しようというんだ」

「知るかよ。国のためと言えどどんな言い分でも通るさ」

「何もケイル様のもて成しの最中に来なくとも……」

まだ姿も見えないというのに小声で囁くように不平不満を吐く村人達。しかし音が近付くにつれ、いつもとは違う音の多さに違和感を覚えた。地揺れのような無数の蹄音。徒ならぬものを感じて緊張し閉口する。

そして小路の陰から次々と吐き出される騎馬隊に、村人達は目を剥く。いくら経ってもその縦列は途切れる事なく、最後の一騎が出る頃にはその姿は目視が適わず、村人達の目前には騎馬による壁が出来上がっていた。

栗色の毛並をした軍馬の上には、くすんだ鉄製の兜を被り、鎖帷子くわいすいを纏った王国兵達。剣や槍や斧、弓矢や大鎚など、実に剣呑な武器の数々を身に携え、何人かはいつでも使用できるよう既に手に握っていた。

馬上からの威圧感のある視線に、村人達は怯えるように敷物の中央に身を寄せる。

しかし兵士達にとって村人は眼中になかった。その視線の先は村人達の中心、異形な姿をした者、ケイルに注がれていた。

ケイルは無言で前方の村人達を脇に押し遣り、人垣から歩み出て騎馬隊と正対した。既にマスクを装着しており、その諸手にはレイピア ABR2 圧縮空気式自動小銃が携えられている。

するとケイルの正面の騎馬隊が左右に割れ、出来上がった道を一騎の騎馬が近付いて来た。

それは背が低く、せんが細い印象のある青年だったが、装備が他の兵とは明らかに違う。隙のない甲冑で身を固め、頭には飾羽による控えめな装飾が施された兜を被っている。ポルミ搜索隊のライアス百人隊長だった。

「……」

村人やケイルから見れば、威風堂々と近付いて来るように見えたくもされないが、その実、ライアスは戸惑っていた。他の兵達も同様である。

地肌が一切視えないほどに全身を洩れなく覆い隠す奇怪な甲冑。魔物の一種のような異様な形相。奇妙な形をした杖のような武器。ケイルの姿形は王都を発つ前に知らされていた賊の外見特徴と完全に一致していた。

ポルミ搜索隊が赴く予定であった村や街、その中でも最寄の目的地であり一番寂れたポルミ村では賊の情報を得られる可能性は極めて低いと考えられていた。それなのにいざ到着して見れば、賊の外見特徴に尽く合致する人物が村の中央に居たばかりか、どうやら村人達と一緒に宴会の最中だったようなのだ。更には、逃げようとも抗おうともせず、自ら進んで騎馬隊の前へと歩み出てきた。

本来であれば有無を言わず武器の切っ先を突き付け、縄で縛って連行するのが賊の扱いとしては当然であるが、あまりにも予想外の事が多く、どうしても戸惑いが生じ、慎重になってしまう。

ライアスは馬に跨ったまま、眼下のケイルの姿をまじまじと観察してから、露骨に怯えた眼差しを寄越す村人達を見渡して、口を開いた。

「我らは国王ディソウ様の命を受け、馳せ参じた。その命とは王家に害を為した賊の搜索だ。そして、賊の外見特徴が其の方と一致する」

淀みなく持ち上げた指先をケイルに突き付けるライアス。村人達はケイルへライアスへと忙しなく視線を彷徨わせながら小さくざわめく。

「俺の外見特徴と一致する、と言ったか」

ケイルが不意に声を発した。如何なる強者であろうとも多少の怯みが生じるはずの馬上からの視線。それを全周から満身に浴びているにも関わらず、その声は冷静どころか、静かな凄みある威圧感が

含まれていた。

「それは間違いないのか？」

その唐突で不躰な詰問に一瞬ぎくりとしたライアスだが、同時に確信した。この男が賊である、と。ケイルの言葉を弁明だと受け取ったのだ。このような者がそうそう居るはずがなく、人違いとは考え難い。

「其の者を連行しろ」

ライアスが短く指示すると、周りの兵士達が馬から降りて、武器や縄を手に慎重にケイルを取り囲む。何かを考え込むように俯くケイルと距離を詰める兵士達。

その張り詰めた緊張感は、突然の絹を裂くような悲鳴によって寸断された。

一同が弾かれたように悲鳴の聴こえた方を見る。

「あいつら……」

ライアスは最早溜息を通り越し頭痛を覚え、頭に手を当てる。

頭痛の種と悲鳴の元は、バリーガ分隊だった。皆が密集する村の中央から少し離れた位置にて、勝手に隊を離れたバリーガが嫌がる若い女の村民を取り押さえていた。他のバリーガ分隊の面々も家屋に進入したり、敷物の上に並べられていた料理や葡萄酒に手をつけたりと、まるで盗賊のような傍若無人な振る舞いだ。

「おっと。すいやせん。こいつが騒ぐもんで」

皆の視線に気付いたバリーガはこれ見よがしに女の胸を鷲掴みにし、首筋に舌を這わせる。女が苦悶の声を発すると、その頬を強くはって黙らせた。

「こっちはこつちでよろしくやらせてもらうんで、そっちはそつちで勝手に進めててください」

「ま、待て、バリーガ分隊長！ 貴様、王国軍人として恥を知れ！」
流石に見過ごす事は出来ずにライアスは声を張るが、激昂した上官のあしらい方を心得ているのか、当のバリーガはどこ吹く風といった様子で微塵も怯まずに肩を竦めると、女を担ぎ上げ最寄の家屋

に向かって歩き始めた。

ライアスは口をぱくぱくとさせる。精一杯の恫喝をそのようにあしらわれてしまうと二の句を継げない。取り直すように舌を打ち、ケイルを取り囲んだまま固まっていた兵達に作業を続けると促す。

「おい。あんたが大将なんだろ」

ケイルの声。じりじりと距離を詰められているにも関わらず、そこらには一瞥もくれずに、その淡く赤い光を宿す不気味な双眸はライアスに据えられていた。そして酷く平坦な声色で言葉を続ける。

「今すぐ、奴らを止める」

ライアスは思わず息を呑んだ。眼下の異形が放つ雰囲気は、今にも捕らえられそうな賊が発するべきものとは懸け離れていた。まるで周囲の兵達の敵意など意に介していないような、絶対優位にあるような態度だ。

村の外れでは、家屋の扉を開けたバリーガが、女を中に投げ飛ばし、自身も中に入ってから後ろ手で扉を閉めようとしていた。

「時間切れた」

「え？」

ライアスは目を疑った。

瞬きの直前まではケイルは正対して立っていたのに、目蓋を開けた瞬間にはバリーガの方に向けて奇妙な形の杖の先を構えていた。まさに瞬く間。

そして杖の先端部から微かに霞のようなものが噴出し、薄い皮紙を引き裂くような鈍い音が僅かに響く。

再び先と同じ女性の悲鳴。

音源へと皆が視線を移す。それはケイルの杖が指し示す方向と同じ。

バリーガの頭部が消失していた。頭部を失った身体はよたよたと二、三歩歩き、虫食いのような頸部の切り口からは血液が心臓の鼓動に合わせてビュルツビュルツと筋上に噴き出す。その自身の身体の惨劇を股下から窺っていたバリーガの頭部はぱちくりと瞬きをし、

倒れこんで来る身体の下敷きになった。

「え？」

ライアスの疑問符が発せられるのと同じ時。既に次の標的を照準していたケイルは淀みなく引き金を切る。盗んだであろう食料袋を肩に下げて家屋から出てきた二人組みのバリーガ分隊員。二人の頭部が刹那の時間差を置いて虚空に舞う。

頸部に集中した横薙ぎの短連射。ヘカトンケイル特有の精確無比な射撃精度と貫通力の高い通常弾ボールを毎分千発の連射速度で吐き出すレイピアを併用する事で成せる業、勿頸ふんけいだ。

「こ、この野郎お！」

誰もが目の前の超常に呆然としていた中で、逸早く反応したのは敷物の料理を漁っていたバリーガ分隊員達。腐っても歴戦。如何なる理屈が見当も付かないが、それでも離れた位置に居た仲間達の首を次々と刎ねているのは奇妙な杖を構えるケイルだと察し、怒号を上げて武器を手取る。

だがその殊勝さが命取りとなった。振り向いたケイルに合わせて流れるように移動するレイピアの銃口が散発的に圧縮空気を噴く。バリーガ分隊員達の胸部から粉碎された鎖帷子の破片と鮮血が噴き出し、大皿や料理を撒き散らしながら次々と倒れ込む。ケイルに向かって一步を踏み出す前には残り五人のバリーガ分隊員は敷物の上で絶命していた。広がる血溜りに零れた葡萄酒が斑に混ざり、異様な色合いに模様付く。

辺りは水を打ったように静まりかえっていた。

「え？ あの、え、え？」

成らず者ではあったが搜索隊の中では一番腕が立つはずのバリーガ分隊。それが一瞬で全滅してしまった事実にはライアスの思考はまだ追い付いていない。

ケイルを捕らえようと間近に立っていた兵達は玉のような冷や汗を噴きながらじりじりと摺り足で後退し、ケイルの徒ならぬ強さを知っていた村人達でさえその異能を目の当たりにし、畏怖の面持ち

で僅かに後退りする。

だが距離を置き事態を客観視していた故に冷静であつた数名の弓兵が矢筈^{やはず}を弓の弦に番えようとしていた。

ケイルは瞬時に弓兵達に銃口を振るが、

「止めときな！」

サイの大音声が轟いた。

皆の視線を浴びながら村人達の人垣を割って現れたサイ。ケイルの横に並び、ライアスを見上げる。

「まさかとは思つたけど、やっぱりそうだ。泣き虫のライアスぼっちゃん^{やう}が百人隊長とは、王国軍はよっぽど人手不足みたいだね」

「サイミクス先生……？」

呆然とした様子で呟くライアスだが、サイを凝視する表情が見ると驚嘆のそれに取って代わる。

「こ、こんなところに落ち延びていたのですか！？ いったい僕がどれほど心配したと——」

しかしそこで不意に言葉を止め、神妙な面持ちとなり言葉を改めた。

「サ、サイミクス・ミレン・メイフェ！ 地に堕ちたミレンの字^{あだな}を持つ者が、よもや王都にほど近いポルミの村に身を窺^{やう}していたとは」

「おやおや、昔はあんなに可愛がつてあげたのに、寂しいねえ」

「っ！」

肩を竦めるサイに怯んだ様子を見せるライアスだが、横に立ち並ぶケイルを見て思い出したように語気を荒らせる。

「そんな事より！ 先の発言はどういう理由かつ！ 王家を害した賊を庇い立てすると言つのかっ！？」

「その王家を害したつてのはわからないけど……」サイはどこか寂しげな表情でちらりとケイルを窺うが、すぐに向き直る。「あたしが庇つてあげたのはあんた達の方さね」

「なんだと！？ それはどういう意味だ！」

「そのままの意味だよ。見てただろ？ あんたの碌でもない部下達

を一瞬で皆殺しだ。悪いけど、あんたらが束になってかかってもこの男、ケイルには敵わないと思うよ。大袈裟じゃなくね」

「な、なにをつ！ さっきはふ、不意を突かれたただけだ！」

「じゃあ訊くけど。大型の魔物二十匹から成る群を討伐するのに何人ぐらいの兵が必要かわかるかい？」

「馬鹿にするな！」ライアスは考えるように暫し沈黙する。「そ、そうだな。百か、いや、二百は欲しいな」

「ご名答。流石は百人隊長殿」

サイは皮肉げに拍手を送ってから、ケイルの肩に手を置いて言葉を続ける。

「さて、じゃあ、あんらが二百掛かりでやつとこさなその大型魔物二十匹を、ケイルがたった一人で、しかも無傷で屠ったと言ったらどうする？」

「な、なんだとツ！？ 嘘を言うなつ。そんな与太話、信じられるか！」

「嘘じゃないよ。魔物を退治して村を救ってくれたから、こうしてもて成してたんだよ。難なら、ほら、そっちの方にケイルが今朝獲ってきたばかりの魔物の大将首が転がってるだろ」

まるで庭の畑から野菜が何かを収穫してきたかのように言うサイ。彼女が指し示す方向に居た兵士達は、足元を見渡して、奇妙な物体に目を止めた。馬から降り、確認してみると確かに魔物の首だった。視界に入っていたはずなのに見逃したのはあまりの大きさに岩か何かと思っていたからだ。

「た、隊長！ 間違いありません。魔物の首です！」

「こんな大きな魔物、見た事ありません！」

部下達からの報告にライアスは顔を引き攣らせる。

確かによくよく見渡せば村人達には負傷している者も多く、一月二月前の怪我という風ではない。魔物の襲撃があつたのは事実なのだろう。その襲撃者たる兵ですら見た事もないような大型の魔物を村人達が自力で撃退したとは到底思えず、サイの話が俄然真実味を

帯びてきた。

そして、ライアスがこの搜索任務に感じていた違和感。軍の上層部がたった一人の賊に対して可能な限りの兵を投じた理由。

「……そういう事なのか。なんて、ことだ」

賊の異常な戦闘能力を予測していた上層部がなぜそれを現場に伝えなかったのか。ライアス是不審を覚えるが、今はそれどころではない。なにせ、上層部が妥当であるとした百という兵力でさえ、太刀打ちできないかもしれない存在が今まさに眼下から不気味な双眸で見詰めているのだ。

自分達は、とんでもない存在を敵に廻してしまったのかもしれない。

もし今ここで戦いが始まったとしたら、真っ先に狙われるのはその敵の一番近くに立ち、指揮官を務める兵士、つまりライアスに他ならない。

だが、それでも引き下がるわけにはいかない。目標である賊を目の前にしておきながら、敵わないかもしれないので撤退しました、では済まされるわけがない。百人隊長には下級指揮官たる責務がある。如何に強大な相手にも臆する事無く果敢に挑む。王国軍人の矜持だった。

「もう一度訊くが」

三度唐突に発されたケイルの言葉にライアスは見つともなく悲鳴を上げて仰け反ってしまった。

「その賊の外見特徴が俺と一致すると言ったな」

ライアスは震える身体を誤魔化そうともせずに肯首する。

「そうか。じゃあ、詳しく話してもらおうか。その話次第では付いて行ってもいい」

付いて行ってもいい。それは自ら進んで王都に赴くという意味だ。つまり出頭。予測不能な出来事の連続にパンク寸前だったライアスの思考回路は、ケイルの発言が止めとなり耐え切れずショート。ぽかん、と口を開け放心するのだった。

7 賊搜索（後書き）

感想、アドバイス、要望、評価等々、気軽に送ってやってください。
お待ちしております。

8 野営

薄暗い森林の小径をゆつくりと進む騎馬隊。

見上げれば、傾きかけた太陽が空と背の高い樹木の上部を茜色に染めている。それは観る者の情緒を豊かに刺激してくれる光景に違いなかったが、騎馬隊の中には天を仰ごうとする者は誰一人として居なかった。

隊列の後列の兵士は首を伸ばすように、前列の者はさりげなく振り返るように、頻りに隊列中央を見遣っていた。

彼らの視線の先には騎馬隊の指揮官であるライアスと、異形が一体、そして招かれざる客人が二名。

呆けていたライアスは正気を取り戻し、ケイルが求める情報、つまり王家を害した賊について、自身が知り得る限り語り聞かせた。

とは言っても、彼が知っていたのはケイルの姿形をそのまま言い表したような賊の外見特徴と、王都を脱した賊が森に逃げ込んだという事のみ。具体的に賊が王家に対して何をしたのか、ライアスは聞き及んでいなかった。

おそらく故意に知らされないように情報制限が敷かれているのだろう。その辺りの事情が、賊の異常な戦闘能力というそれと相対する搜索隊にとって最も重大と言っても過言ではない情報が隠蔽されていた事に関係している——と、わざわざ言わなくてもいいような事まで、正気を取り戻したが混乱と恐怖を拭い切れなかったライアスは喋ってしまった。

それを受けたケイルは暫し思案した後、静かに言った。

「王都まで案内しろ」

搜索隊も村民達も、ケイルが何を考えているのか、さっぱり理解不能だった。口調や態度から察するに素直に縛^{ばく}に就くつもりはさらさらないようだ、それなのに自ら王都に赴くのは如何なる理屈か。いつでも発てる、と言うケイル。ライアスはそこはかとなし不安を抱きながらも断る理由を見い出せず、王都への帰路に付こうとした。

しかし、傍で状況の推移を見守っていたサイが制止した。

「ちょっと待って。少し時間をちょうだいよ」

何故、という問いに、さも当然のようにサイは宣う。

「あたしも付いて行くからさ」

静止する一同。

ケイルに続きサイまでもが、何を考えているのか理解不能だった。ただし、ケイルも怪訝^{あん}に思っただけらしい。

「もし俺の身を按^あじて言っているのなら、必要ない」

しかしサイは粗野に笑って、顔の前で手を振った。

「あんたの身を按^あじるだって？ 止しとくれよ。あんたほどの強者^{つわもの}を心配する器量なんて、生憎あたしは欠片も持ち合わせじゃないよ」

「じゃあ何のために？」

「もう一つの頼み事だよ。暫くの間、あんたと一緒に居させておくれよ」

「……何のために？」

少々邪険な同じ問い掛けの繰り返し。拒絶の意思が含まれていた。この世界に来てからまだ数日だが、既に血生臭い所業が少なからず。そんな状況が一変してこれからは無血で過ごせるとは到底思えない。つまり行動を共にすれば危険がある、と。ケイルは遠回しに伝えたかった。

そんな意図を汲み取ったサイは頭を掻きつつ苦笑した。それでも言い募る。

「うーん。なんて言うべきか。話せば長くなるし、私自身も曖昧な

直感みたいなものだからねえ。ま、追々ね。だから今は、重大な何かのために、とだけ言っておくよ。あたしも色々思うところがあるわけさ。あ、あんたが断つても勝手に付いてくから気にしないでいいよ」

重大な何か、あまりにも漠然とした言葉だが、サイの決意は固まっているのだろう。勝手に付いて行くと言われた以上、準備のために自分の家へ向かって駆けて行くサイの背中を黙って見送るしかない。

『白魔術士が仲間になった』

含み笑いを漏らすアーシャにケイルは舌を打った。

数分後に革製の大きな旅行鞆と麻袋を持って家から出てきたサイ。村人達は視線や控え目な言葉で彼女を引き留めようとした。村唯一の魔術士を失うわけにはいかないという打算的な考えもあるのだろうが、魔術士という職業をちつとも笠に着ずに誰に対しても開けっぴろげなサイという人間を皆が好いていたのだ。

サイは軽薄な調子で謝りながら負傷者へと処置等の申し送りをし、泣きながら抱き付きダダを捏ねる少女や少年を一頻撫でてやっていた。

そして主（バリーガ分隊員）を失い、所在なさに草を食んでいた一頭の馬に跨った。

ライアスの指示で出発しようとする一同。

だがケイルの前には一人の少女が立ち塞がっていた。おかっぱの黒髪と褐色の肌、凍り付いたような無表情。ケイルが母親の埋葬を手伝った少女だ。

「……何か用か？」

少女は応えず、能面のような表情でケイルを見上げていた。

『仲間になりたそうな目でこちらを見ている、ってやつじゃない？』
アーシャの不吉な言葉は的中する事になる。少女は不意に視線を切り、サイの方へと駆け寄った。そしてサイの馬へと飛び乗ったのだ。

「おいおい。あんたも付いて来る気かい？ 危ないって」

しかし少女はサイの腰にがっちり手を回して、頑として動こうとはしなかった。

付き合ってられないとばかりに進み始めてしまった騎馬隊。

天涯孤独という少女の事情を知っているサイは小さく嘆息し、少女を乗せたまま隊列に沿って進み始めた。

『クーデレ少女が仲間になった』

「……黙れ」

そんな経緯で、約九十の兵から成る縦列の中央、ライアスの馬の後方を徒歩のケイルが、ケイルの隣にはサイと少女を背に乗せた馬がのんびりと歩いている。

ちなみに、ケイルが馬に乗らないのは馬が嫌がるからだ。ケイルが殺害したバリーガ分隊員は八名であり、サイと少女が乗る一頭を引いた七頭が空いており、その内の一頭に乗ろうとしたところ、発狂せんばかりに馬が暴れたのだ。気性は荒いが人間には従順なはずの調教された軍馬がそのように暴れたのは、ケイルの体重が重いからといったお約束からではない。ヘカトンケイルの体重はその装備にもよるのだが、平均して百五十キロから百八十キロ。確かに重い馬が耐え切れないほどではない。ただ、ケイルが放つ尋常ならざる雰囲気は本能的に怯えてしまうのだ。

『ま、あなたが馬に乗っている姿とか、不自然過ぎるしアンマッチ過ぎるしキモ過ぎるから。よかったじゃない』

「……」

終始爆笑するアーシャに耐える自信がケイルにはなかったという事情もある。

更にちなみに、賊の最有力容疑者であるケイルにライアスは恐々と申し出た。出頭するつもりなら腕を縄で縛りたいのだが……と。しかし、ケイルは一瞥くれただけで何も応えなかった。シカトであ

る。それでも好き勝手に歩かせるわけにもいかずに、逃がさないために隊列中央に置く事にしたのだ。

斯くして、見つけた賊を連行しているというのはあまりに珍妙な隊列が出来上がった。もし誰かが彼らを見たら総じて、中央の者達を護衛しているかのような、と答えるだろう。

前後列の兵達が油断なく視線を配ってくれていると知りつつも、ライアスとしては生きた心地がなかった。屈強な分隊を瞬く間に屠ってしまうほどの強敵が自分の背後を追従しているのだ。しかもその敵は離れたところに居る人間を瞬時に八つ裂きにできる力を有している。

「なあ、ライアスばっちゃん」

突然のサイの呼び掛け。ライアスはびっくりと肩を揺らして振り返る。

「日が暮れてきたけど、どうすんのさ。このままノンストップで王都まで往くのかい」

もし通常の進行速度であれば明日の日中には王都に着くであろうから、そうしたいのは山々であるが。今は馬に乗れないケイルの徒歩に速度を合わせているので、このペースでは着くのは明日の夜半ほどになりそうだった。その間を休息もなしで行軍するのは些か骨が折れる。兵達の疲労も溜まっているだろう。そもそもライアスとしては今夜はポルミ村で付近で野営をするつもりだったのだ。

「……もう少し進んだところに拓地があったはずだ。そこで野営にしよう」

ほどなくすると、若干ではあるが森林が拓け、小径の脇に丘陵が見えてきた。

そこに馬を乗り入れ、野営の準備を始める兵士達。長期間の遠征を想定していたので準備は万全だった。幾つかの騎馬が牽いていた小型の馬車から荷を降ろして、テントは張ったり、火を焚く支度をしていた。

この世界でも軍は度が過ぎるほどの縦社会のようであり、他の兵

が分隊単位でぎゅう詰め収まる小型テントを、搜索隊唯一の下級仕官であるライアスは一人で使用していた。

そしてテントなど持っていなかったケイル達だが、サイが半ば強引に話を纏める形でライアスと同じテントを利用する事になった。当然、悶着はあった。意図はわからないがなぜか付いて来てしまったサイと少女は、まさに女子供であり、脅威にはなり得ないだろうが、問題はケイルだ。捕縛はおろか、武器さえ取り上げていない賊を指揮官と同じ屋根の下で寝起きさせるなど、言語道断もいいところだ。当事者のケイルでさえ、別に外でも構わない、と遠慮したのだがサイが頑なに聞き入れず、サイに挑発的且つ脅迫的な文言で詰め寄られたライアスは頷かざるを得なかった。

夜の帳を薄暗く照らす焚き火の前、兵士の一団から距離を置いてケイル達はサイが麻袋に入れて家から持ってきたパンや干し肉で夕食を済ませていた。

干し肉をちまりちまりと齧る少女の顔をサイは覗き込んだ。

「えっと、今更だけど、名前はなんだっけ？ 確かゼロットの家の娘だよね」

「……」

しかし少女は答えない。干し肉を咀嚼しながら橙色の焰を見詰めるばかりで、サイを見ようともしない。

「この野郎お」

サイは徐に少女の首筋にチョップを放った。少女は首筋を押さえながら恨めしそうな視線をサイに送る。

「訊かれたら応えるのが常識だっつーの。死んじまった父ちゃん母ちゃんに習っただろ。あんたがいつまでもそんな調子じゃあ、二人も救われないよ」

つい昨日母親を失った少女に掛ける言葉にしては、あまりに酷だ。だがこれが魔物に席卷されつつある世界の常識なのかもしれない。少女が現実と向き合い、受け入れ、それを糧に強くなるのを待ってくれるほど、この世界は優しくないのだから。

しかし少女も然る者。傷付いた表情をするわけでもなく、泣き出すわけでもなく、ただ不貞腐れたようにそっぽを向いて、炎の凝視作業に戻った。

そんな様子を見ながら、ケイルは思い出す。この少女が母親を埋葬していた場面。彼女は一度も悲しそうな顔を見せる事なく、単純作業をこなすように淡々と気丈に自分の母親の墓を掘っていた。それが彼女の強さが成せる事なのか、それともまだ現実と向き合う過程にすら至っていないのか、ケイルには判別できなかった。

唯一彼女が見せた明確な感情は、魔物が憎いか、と問うた時の激情の貌だけだった。

「そういえば」

サイに視線を移し、気になっていた事を訊ねる。

「ライアスとか言ったか、あの隊長。彼と顔見知りみたいだな」

「ああ。もうずっと前の話さ。あたしはね、王都の生まれなんだよ。その時にさ、まだこんなんだったあいつの教育係を仰せ付かった時期があってね。ま、あたしもこんなんだったけどさ」

座ったままの体勢から自分の頭ほどの高さで手を振るサイ。次にそこから頭一つ分高い位置を示す。最初がライアスの身長、次がサイ。つまり幼少期という事だろう。

「しかし、あんたもまだ子供だったんだろ。教育係なんて勤まるのか」

「これでもあたしはそこそ良い家柄の生まれでね。代々王国に仕えてきた魔術士の家系さ。だからガキの時分でもそれなりの英才教育を受けてたから、武家のぼっちゃんの躰ぐらいはわけないんだ」

もっとも、ほとんど近所の悪ガキ相手に遊んでただけなんだけどね、と付け足して、サイは少年のように悪戯っぽく笑う。

「あのサイミクス先生って呼び方。あたしがそう呼ばせるように身体に教育したんだよ。本当は師匠って呼ばせたかったんだけど、女が師匠なんて嫌だって、妙に頑固でさ」

ライアスがサイに頭が上がないのも頷けようものである。身体

に教育されたという幼少期のトラウマを払拭するのは難しい。

懐かしそうに思い出話を始めたサイ。ケイルは合間を見計らって、切り出した。

「なんで王都を離れたんだ？」

「それは……」

サイは一瞬戸惑いを見せて、視線を落とし口を閉ざしてしまった。このリアクションは予想していた。村でライアスが口走っていた言葉。『地に堕ちたミレンの字を持つ者が、よもや王都にほど近いボルミの村に身を窺っていたとは』。その言葉から、自ら望んで王都を離れたわけではないのは想像に難くない。

「まあ、色々あつてね。実はその辺りの事情があたしがあんたに付いて行こうと決めた理由とも絡んでくるんだけど、追々ね、追々」誤魔化すようにパン切れを口に放り込むサイだが、不意にケイルを見て意地悪く笑う。

「つーかあんたも図々しい男だね。自分の事は何一つ語らない癖に、あたしにだけズケズケと訊きやがる」

「それもそうだな。悪かった」

「いーや、許さないね。まずは王家を害した云々って話をもの凄く聞きたいんだけど」

「……俺も追々な」

テントに戻ると、オイルランプの仄かな灯りの中、入り口に背を向けて隅で何やらごそごそとやっていたライアスが、慌てたように何かを隠した。サイの目が怪しく光る。

「あらあらあらあ？ 何やってたんだい、ライアスばつちやあーん」

「な、なんでもないっ」

「いやいやいやいやあ。その慌てよう。まさか、ナニやってたわけかい？」

「そ、そんなわけあるかつ」

「あれあれあれあれえ？ あたしはナニとして言っていないのに、ラ

「イアスぼっちゃんは何にを想像したのかなあ？」

「っ！」

「ま、しょうがないよねえ。溜まるもんは出さなきゃね。男はツライねえ。けどあんまりやり過ぎないでね。居るだけで妊娠しそうな生臭いテントで寝るのは勘弁だからさ」

「ち、違うと言ってるでしょう！」

「あたしとこの子はちよつと距離を置いて、こっちの隅で寝させてもらいますから。お構いなく」

「ち、違います。本当に違うんです、サイミユス先生！」

まさにいじめっ子といじめられっ子の構図だった。いつの間にか敬語になっている辺り、ライアスがいかに虐げられた幼少期を送ったのか窺い知れる。

『流石姉御、勉強になるわね』

神妙に頷くアーシャ。ケイルとしてはこれ以上くだらない勉強をして欲しくなかった。

必死に無罪を主張していたライアスだが、終に観念したように懷から皮紙を束ねた本のような物を取り出した。

「これです……。日記ですよ」

意味がわからずに首を傾げる一同。だがサイだけは驚いたように目を見張る。

「あんだ、日記ってまさか、まだ書き続けていたのかい!？」

「先生が言っただんでしょ……。字の練習と状況の把握力には日記が一番だつて。これから死ぬまで一生続く宿題だつて」

どうやら以前、サイが教育係を務めていた頃、ライアスに日記を書くよう指導したらしい。

「でも、まさか、もう二十年も前の……」サイは言葉に詰まり、大仰に嘆息し苦笑した。「呆れたよ。でも、よく頑張ったね」

「先生……」

微笑を湛えるサイと頬を染めるライアス。だが、サイの目が再び光った。

「じゃあ、宿題の出来を確認しないとねえ」

「へ？」

頬を朱に染めていたライアスだが、今度は真っ青に血の気が引く。「当然だろう。教育係の務めさね。ほら、こっちへ超越しな。あんたが何を思い、何を感じたのか、二十年分の嬉し恥し成長日記を、しっかり音読してやるから」

「い、いやいや、これは一生続く宿題であって、言うなら生涯終わらない宿題であって、で、出来を確認する必要はないかと」

「屁理屈はいいから。こっちへ超越せ」

広げた両手をわきわきと蠢かせ、にじる寄るサイ。ライアスは文学少女よろしく日記を胸に抱えて後退る。

騒々しくなりそうな気配を察して、ケイルはそっとテントから出た。ライアス護衛のためであるう、入り口の近くに立っていた兵士達が飛び退いて、何食わぬ顔で離れていった。

間髪容れずにドタンボタンと追い駆けっこをするような物音が背後から聴こえてくる。

ほどなくして少女も外へ退避してきた。ケイルの横に並び、テント群の中央、兵士達が取り囲む焚き火を再び凝視している。瞳の中心に映った小さな炎が揺れていた。

「名前は何て言うんだ？」

ケイルの問い掛け。少女はやはり答えず、ケイルが会話を諦めかけた頃、ぽつりと呟いた。

「……ゼロットでいい」

サイが少女の家の名を指した名称だ。つまりゼロットとは名字なのだろう。

ケイルは「そうか」と、短く頷いた。少女がそう呼ばれる事を望むなら、無理に言及する必要はない。

「炎」

少女、ゼロットはまたぽつりと言った。訝ったケイルはゼロットを見遣る。いつの間にかゼロットは焚き火から視線を移し、ケイル

の双眸をじいつと視ていた。

「あなたの眼と似てる」

「……そうか」

何かしらの形で決着がついたのだろう、背後での騒音が収まった頃、ゼロットはテントの中に入っていた。

するとゼロットが立っていた位置には取り代わるようにアーシャが立っていた。

『そういえば、あの子。……な、なんてことッ』

アーシャは何かに慄くような徒ならぬ面持ちでテントを振り返る。ケイルは思わず佇まいを正した。

『おかっぱで美少女……。わ、私とキャラかぶってる……。！』

ケイルは黙ってテントに入っていた。

マスクの中の顔は、ゼロットよりも更に冷たい無表情だった。

9 城壁（前書き）

更新が遅くなりました。申し訳ないです。

9 城壁

ライアスは自分の所属する第八大隊の兵舎、その上級仕官詰め所の一角にて、終始硬直していた。椅子に腰掛けた姿勢のままで爪先から頭まで、微動だにする事ができなかったが、視線だけは忙しく泳いでいる。

ライアスの目の前には、第八大隊二十一中隊の大隊長と中隊長、そして更に王城近衛兵団の兵団長までもが、雁首を揃えている。つまり軍部の錚々たる面々が、目前でむっつりとした表情で鎮座しているのだ。

日はとつくに落ちており、随所のオイルランプの頼りない灯りが、彼らの顔に濃く影を落とし、より一層険しく見えてしまう。

ライアスの甲冑の中は脂汗でぐっしょりだが、それに嫌悪感を抱く余裕さえない。

「小隊長から報告は聞かせてもらった。が……」睨むような視線でライアスを射抜きながら、大隊長は鷹揚に口を開く。「どうにも要領を得ない部分が多くてな。貴様から直に聞きたい。最初から話してみる」

「は、はひっ」

ライアスは弾かれたように間の抜けた返事をして、訥々と語る。

「わ、我々ポルミ搜索隊は、最初の目的地、ポルミ村にて賊の外見特徴と酷似した不審人物を発見。話してみたところ、素直に出頭するとの事でしたので、つ、連れて参りました」

「おい、端折るんじゃない。報告には賊が抵抗し、貴隊に損害が出たとあったぞ」

「ひゃひ、す、すすすいません。し、しかし、畏れながら、その人物は抵抗したと言うよりも、そのお、なんと申しましょつか……」

言葉を詰まらせるライアスに、大隊長は嘆息する。

「起きた事を正直に、有りのままに話せばよいのだ」

「……そ、その、恥ずかしながら、我々の隊の中には素行の芳しくない兵卒達が数名所属しておりまして、村に着いた途端、その者達が村人達に対して狼藉を働こうとした所、その、ぞ、賊に似た人物に殺害されたのです……」

顔を顰める大隊長に、中隊長が顔を近付けた。

「殺害されたのはバリーガの分隊との事です」

「バリーガ……。あの者か」バリーガの悪名は大隊規模で知れ渡っているようだった。大隊長は然もありなん、といった様子で呆れたように鼻から嘆息する。「しかし、確かに素行は悪くともバリーガ分隊は先の大戦にも従軍した歴戦だ。黙って殺されるような者達ではあるまいに」

「そ、それが、その人物は非常に強力な未知の魔道を有しているらしく、瞬く間にバリーガ分隊の全員を殺害してしまつたのです」

それを聞いた大隊長と中隊長は、意味ありげに王城近衛兵団の兵団長を一瞥した。兵団長は口を噤んだまま、ライアスを凝視している。

「それで、貴様の話では、まるで賊が村人を護つたような口振りだな」

「は、はい。その通りです。なんでも、その賊に似た人物はポルミ村を襲つていた魔物の群を退治したとの事。我々が到着した際には、村総出でその人物をもて成している最中のようなようでした」

そこで突然、中隊長が声を荒らげる。

「なんだとっ！ 王家に害を為した賊をもて成していたと申すかつ！？ 反逆罪だ！」

「お、恐れながらっ、村人達はその者の事情を何も知らない様子でしたので、無理からぬ事かと……」

それでも中隊長は納得できない様子で憚然と腕を束ねた。大隊長は詰問を続ける。

「それよりも、賊が魔物を退治しただと。それはまことか？」

「はい。そのように聞いておりますし、み、見た事もないような大きな魔物の生首が打ち捨てられていたので、間違いないかと」

「……。して、話を戻すが、バリーガ分隊が殺害されたその後、貴様達で賊をひっ捕らえ、連れてきたというわけか」

「え。いえ、あの……、最初に申し上げた通り、ひっ捕らえたというには少々語弊が……」

「どういう意味だ？」

「ふ、不可解な事なのですが、その人物は王家を害した賊の情報を欲しておりまして、私の知る範囲で聞かせた所、出頭すると自ら申し出たのです」

大隊長は眉を寄せ、暫し沈黙した後に、同じ質問を繰り返す。

「それは……どういう意味だ？」

「さ、さあ……」ライアスは半笑いのような情けない表情で首を傾げた。「私にもわかり兼ねます」

「それで」

と、今まで沈黙を守っていた近衛兵団長が徐に口を開いた。

「その賊は今何処に？」

「は、はい。王都の外、南門の前にて搜索隊と共に待機させております」

「そこだ。そこがわからん」大隊長が割って入る。「そもそも何ゆえ貴様が一人だけ先行して報告に参るのだ。その賊を引き連れてここまで帰投すればよろう」

ライアスはより一層面持ちを硬くし、ごくりと生唾を飲み下してから口を開く。

「……あの、じ、実はですね。その件について先んじて知らせなくてはならない事があると思ひまして、私が一人で報告に戻ったのです」

「なんだ？ 言ってみろ」

「……ひ、非常に申し上げ難いのですが、現在、賊に似た人物には、

そのお、な、縄を打っていません」

一瞬の間。大隊長と中隊長の表情が見る見る歪む。信じられないものを見るかのようにライアスを凝視していた。

「な、なんだと……？ 王家を害した賊に、縄も打たずに、自由気ままに歩かせて参ったと申すか……？ こうしている今も、南門の周囲を気の向くままに彷徨わせているというのか……？」

呆然としたような声色に含まれるあまりの凄みに、ライアスは身体の硬直も忘れ、椅子から飛び上がり跪いた。そして床に擦り付くんばかりに頭を下げる。

「も、申し訳ありませんっ！ ……ただ、その人物は逃げるような素振りも見せず、ある程度は協力的と申しましょうか……。それに、その、こう言ってはなんですが、強制的に縄を打つような事をしたら、どうなるかわからなかったの……」

「どうなるかわからなかった、だと……？ き、気は確かかッ！？ 貴様の頭の中身がどうなっているのかわからんわ！ 虚^{うつ}けがッ！」

「ライアス下級仕官！ 貴様ッ、然るべき処罰を覚悟せよ！ 大隊長、すぐに兵を出しましょう！ 賊を早急に牢に繋がなければなりませんッ！」

烈火の如く怒り、賊の対処に立ち上がろうとする大隊長と中隊長だが、近衛兵団長が手で制した。

「待ちなさい、二人とも。彼の判断は正しい」

言って、ゆっくりと立ち上がり闇夜を映す窓辺に歩いていく近衛兵団長。三人は静止してその様子を目で追っていた。

「私がこれから話す事は、王国の沽券^{こけん}に関わる事情ですので、他言なきよう」

そう断ってから、近衛兵団長は語り始める。

「五日前の事です。ミリア王女様の身の周りに仕える女官の一人が、不審な人物が王女様の部屋に現れたと、近衛兵詰め所に駆け込んできたそうです。その場に居合わせた近衛兵達は総出で王女様の部屋へと向かい、そして」

言葉を区切り、振り返る近衛兵団長。その顔は恐ろしいほどに無表情だった。

「全員、殺されてしまいました。たった一人の賊に、二十八名もの近衛兵達が、全員、一人残らず。奇跡的に一命を取り留めた者もいません。いつそ清々しい、完膚なきほどの皆殺しです」

三人は息を呑む。無表情で語る近衛兵団長だが、その声色には明らかに激情が含まれていた。そして何より精鋭の近衛兵達がただ一人の賊に圧倒されたという事実、に、慄いた。

確かに近衛兵の勤務は儀仗的ぎじょうな色合いも強く、最前線で戦う兵士ではないが、それでもその兵士の中から特に優れた武術を有する者達だけが王城に常駐する近衛兵に名を連ねる事が許されるのだ。つまり、そんなところの雑兵とは、比べ物にならないほどに精強であるはずなのだ。

「王国の誉れである近衛兵が、たった一人の賊に遅れをとるなどあってはならない事です。そんな噂が諸外国に広まれば、我が近衛兵団だけでなく、無敵を誇ってきたライガナ王国の兵力までもが疑問に問われてしまう」

近衛兵団長は、跪いたままのライアスに歩み寄った。

「それ故の箝口令かんこうれいです。中隊長以上の高級士官には近衛兵に被害が出たとして、下級士官以下にはそういう出来事があつた事すら知らされてはいけません。搜索隊も疑問に思つた事でしよう。なぜ、たった一人の賊に百人もの兵が出張らなければならないのか、なぜその理由を知らされないのか、と。それにはそういった事情があつたですよ。理解してください」

疑っていた箝口令の事情を明かされて、ライアスは俯くように曖昧に頷いた。床を見詰めながら、唇を強く結ぶ。堕ちるかどうかもわからない王国の面子と引き換えに、自分と部下の命が危険に晒されたのである。それを全肯定できるほどライアスは愚直な軍人ではなかった。

しかし、そんなライアスの心情など気にも留めずに、近衛兵団長

は大隊長と中隊長の方へ振り返る。

「そして、それほど強力な力を有した賊を無理に捕らえようとすれば、少なからず被害が出る事は必至。南の門前に屯している大勢の避難民にそんな醜態を晒すような真似は、断じて許されません。そこで、私が部下達を率い、丁重に應對したいと思いますが、いかがか？」

どうするつもりかは知りようもないが、近衛兵団長の言う丁重な應對とは、決して言葉通りの意味合いではないだろう。それでも何か具体策があるのならばと、大隊長と中隊長は頷くしかなかった。そこで、突如として部屋の扉が勢いよく開け放たれ、一人の兵士が飛び込んできた。その顔色は狼狽に血相を変えていた。

「も、申し上げます！ 魔物です！ 魔物の襲撃です！」
その一言で一同が色めき立つ。

「なんだとっ！ 一体どこからだ！」

ライアスは、後に続く兵士の言葉を耳にして、近衛兵団長の具体策は不発に終わり、事態は更に複雑な方向へと転がり落ちていくのを予感する事になる。

「南です。南門の前に、魔物が大挙として押し寄せています！」

ケイルは門を見上げていた。

切り倒した巨木を縦に連ね、横に渡した鉄板を杭で打ち付けてある。観音開きではなく、内から外にしか開かない仕組みだ。もし人力で開けるのならば、数十人の男手が必要になるだろう。

視線を脇に移すと、鼠色の巨大な壁が延々と延びている。

高さは十メートルほど、削り出しであろう無骨な岩のブロックが隙間なく積み上げられ、外界の一切を拒絶するように聳えている。空でも飛べないか、長い梯子がなければ乗り越えるのは不可能だ。いや、梯子が用意できたとしても進入は容易ではない。壁の頂上部には弓を持った兵士が等間隔に配置され、眼下に注意を配っている。

今はその注視のほとんどが、下から見上げてくる異形の者、ケイルに集中していたが。

「改めて見ると大したものだな。この国が大陸で一番力を持っているという話だったが、然もありませんってどこか」

その言葉を受けて、腰に手をあて頭上を仰いでいたアーシャが鼻を鳴らす。

『ま、この程度の防御態勢、あなたにとっては有って無いようなものだけだね。万年フリーパスって感じ』そしてケイルを見て、嫌らしく笑う。『実際、五日前はらくしよーで出られたわけだし』

ケイルは肩を竦めながら視線を周囲に移す。

所々に設けられた焚き火。その橙色の灯りを囲むように、数十人の人々が身を寄せ合っていた。老人と子供の姿が目立つ。サイが言っていた方々の町村から王都に救い求めて集まった難民なのだろう。老人と幼子が多いのは、身寄りを失い自活が難しくなった者から町村を離れなければならないからだ。

皆が枯れ木のように痩せ細り、疲れ切った面持ちで、生への活力というものが完全に消失してしまっていた。焚き火から離れた位置で横たえる者達の中には、明らかに事切れている亡骸も幾つか見受けられる。きつと埋葬するだけの気力も残っていないのだろう。

一縷の希望と僅かな食料を抱いて王都へと絶望の旅に出たが、命辛々辿り着いた彼らを待っていたのは、無情な門前払いだったのだ。いや、サイが語っていた推測が正しいのであれば、門前払いよりも更に悪い。彼らは魔物への供物、生贄なのだ。魔物が襲撃してきた際、少しでも時間を稼ぎ魔物の腹を満たすための贄。

そのためここ王都の権力者はあえて彼らを追い返そうとせず、ただただ黙って、あるいはもう少しで空気が出来るからと騙して、集まるがままに、食料が尽きて餓死するがままにしているという事になる。半生半死、生殺しだ。

サイはここに到着してからというもの、動きっぱなしだった。到着早々、過去にポルミ村から避難したのであろう数人の難民と抱擁

と会話を重ね、それから自宅から持ってきた食料をゼロツトと協力して均等に分配して回っていた。それでも難民の総数に行き届くわけもなく、一食分の足しにもならない。

瀕死の者に治癒魔術を施してやってくれと頼まれてもいたが、サイは苦渋の表情で首を横に振っていた。曰く、治癒魔術は受術者本人の自然治癒力を強化促進させるものでしかなく、栄養失調などで極限まで衰弱し自然治癒力が著しく減衰した者に対してはほとんど効果が望めないのだそうだ。

「魔法つてのも色々面倒なんだな」

「魔法じゃなくて、魔術だからでしょ。魔法は奇跡を起こすもの。だけど魔術はそれなりの理屈の上に構成された学術の一種なのよ、たぶんね」

「よくわからんが、万能ではないって事か」

言いながらケイルは振り返り、面倒臭そうに鼻から嘆息する。

背後では、共にポルミ村から遣って来た搜索隊の兵士達が油断ない視線をケイルに注いでいた。横一列に整列しているので、ケイルと難民キャンプは城壁を背にして搜索隊に包囲された格好になっている。自由に歩き回るケイルを逃がさないための措置なのだろうが、正直、ケイルにとって彼らの存在は障害物にさえ成り得ない。ただ射るような視線が鬱陶しい。

「健気なこと。ねえ、ちょっと脅かしてみましようよ。あっちに向かって猛ダッシュするだけできつと蜘蛛の子を散らしたように逃げてくわよ」

「馬鹿言っな。ただでさえ嫌われてるのに、面倒はごめんだ。……にしても、遅いな。ライアスとかいう隊長さんは一体どこまで報告に行ったんだ」

先立つて報告に向かうからここで暫し待機していてくれ、と残して城門の中に消えたライアスだったが、それからもう一時間は経とうとしていた。

「きつと今頃揉めに揉めてるのよ。可哀想に、ライアスぼっちゃん

の半ベソが目には浮かぶわ。拘束される振りぐらいしてあげた方がよかつたんじゃないの？ 精々縄か鎖で縛られる程度でしょ。それぐらい簡単に引き千切れるんだし」

「それは出来ない。舐められるのは癪だし、拘束されて下手にそれを破いたりしたらその時点で脱獄囚扱いだ。後々もつと面倒になる気がする。だったら最初から拘束を拒否しておいた方がいい」

ケイルが言い終えた、丁度その時。

今まで大人しくしていた搜索隊の軍馬が一斉に嘶いななき、落ち着かない様子で身動きし始めた。兵士達は手綱を引き宥めようとするが、一向に静まらない。

人間よりも遙かに敏感な草食動物の危険予知能力が、身に迫る危機を察知したのだ。

そして、草食動物よりも更に鋭敏なケイルのセンサーはもうすでに危険の重大性を覚り、行動に移っていた。

サイとゼロットを呼び寄せ、点在している難民達を一ヶ所に密集させるよう指示を出す。

「一体どうしたんだい。何を始めるき？」

「何か良くないものが森林から近付いて来ている」ケイルは搜索隊の後方、闇に満たされた森林の奥を仰ぎ見る。「それも大量にな」

迷惑そうにしながらも難民達はサイの誘導に素直に従い、ぞろぞろと門の前に集まり始めた。その移動が終わるのと、それが姿を現すのはほぼ同時だった。

兵士の悲鳴。

一人の搜索隊兵士に何か奇妙なモノが取り付いていた。

二足歩行で形は人間と似ているが、しかし衣服を纏っておらず、全身の肌が煤のような黒色であり、毛髪のない頭部には点を打ったような小さな眼球が四つ。そして上下ではなく左右に割れた顎からは、まるで角のように無数の牙が飛び出している。

兵士は振り解こうと暴れるが、四肢でがっしりと組み付いていたそのモノは動じず、兵士の首筋に牙を立てると、頭を繰り返し左右

に倒し、頸部の傷口を拡げ、決る。

気管に流れ込んだ自身の血液で溺れる兵士。大量に喀血し、倒れ込む。それでもそのモノは放そうとせず、鮮血を浴びながら貪るように、しゃぶるように兵士を喰らい始めた。

そして、その奇妙な食人鬼しやうじんきが、森林の樹々の間から次々と姿を現す。その数は大量も大量。目に映る範囲を埋め尽くさんばかりに、闇から産まれ出でたかのように飛び出してくる。

「ま、魔物だ……。魔物だ。魔物だッ！」

絶叫。怒号。阿鼻叫喚。

難民達は泣き叫び、門へと殺到。開けてくれと懇願し門扉を殴打する。兵士達は各々の武器を抜き、雄叫びを上げる。城壁の上部からは魔物出現の警鐘なのだろう、甲高い早鐘の音が鳴り響く。

ケイルは保持プレートから外したレイピアA B R 2を諸手に携え、サイとゼロット、難民達を背にして、目前で繰り広げられる兵士と魔物の戦闘に対峙した。

「あれはなんだ？ どういう魔物なんだ」

「わっかんないわね。私の毒々モンスター大辞典には載ってないわ。グールとか、チュパカブラってところかしら。ま、私ならブラッドサツカーフーウルフって名付けるわ」

「ふん、人狼と同じ理由で却下だな。食人鬼で十分だ」

「で、どーする？ このままじゃその食人鬼に兵士達が食べられちゃうけど」

狼男とは違い、食人鬼は単体の戦闘力では兵士よりも劣っているようだった。剣や槍、弓矢などでも十分に殺傷できている。しかし、問題なのはその数。いくら果敢に迎撃しようとも、森林から吐き出される食人鬼はまるで雲霞のようである。兵士の総数は九十だが、今見えるだけでも食人鬼の数は実に二百以上。しかも秒増しに増えていくのだ。次第に押され、取り囲まれて一人また一人と餌食になっている。

「……しょうがない。手を貸すか」

ケイルはレイピアを持ち上げ、安全装置を解除。

『ひひ。ジグを躍らせてやりましょう』

視界に映る光点を右から左へと、食人鬼の頭部をなぞるように流す。重なった瞬間に引き金を落とせば着弾する道理だ。もつとも、一秒毎に五匹ずつを屠るほどの照準速度は、ヘカトンケイルでなければ到底不可能だが。

元はポルミ村の農機具から生成された六ミリの鉄球。それが指切りによる刻み撃ちで二発ずつ、兵士達の間を縫うように精確に食人鬼の頭部へ叩き込まれる。弾丸の初速は矢に劣るもの、それでも秒間七百メートル。音速の二倍という飛翔物が生物にもたらずのは、全身の毛細血管の破裂による磐石なる死。

柘榴のように弾ける頭部。胆汁のような黄色がかった不気味な体液を撒き散らしながら次々と地に伏す食人鬼。

それを目の当たりにした兵士達は最初は何が起きたのか理解できず、しかし背後で奇怪な音を発する杖を構えるケイルの姿に気が付いた。

門前で泣き喚いていた難民達も、次第に自分達の背後で起きている異常事態に気付き、ただただ目を点にして不思議な力で食人鬼の大群を葬る異形を視ていた。ケイルの力を知っていたサイでさ、初めて目にするその圧倒的な力に見入っていた。

ただゼロットの様子だけが皆とは違っていた。人形のようなだった無表情が、今は明らかに喜色を帯びている。まるで害虫を潰した時のような暗い悦びを湛え吊り上がる口角。爛々と輝く瞳はどこまでも好戦的なそれである。

『残弾数、十二』

「わかつてる」

アーシャに言われるまでもなく、ケイルは射撃しながら前進、丁度弾が切れたタイミングで斃れた兵士が持っていた剣を拾い上げると刀身を適度なサイズに叩き折り、銃床上部のハッチを開け、挿し込んだ。

『うあー、とことんケチ臭いわね。こんな状況でも弾倉を使わないなんて』

アーシャの文句を聞き流しながら、レイピアが弾丸を生成する間、ファイティングナイフを抜き、近づく食人鬼を薙ぎ払う。後退していた兵士の防衛線から単独で突出する形になるケイルに食人鬼は殺到。強大な筋力で振られるナイフは、まるで巨大な戦斧ハルバードを振り回しているかの如く、食人鬼達を両断する。

『弾丸生成完了。ロックンロール！』

全周から押し寄せる食人鬼の波を、右手にレイピアを構え、左手にナイフを持ったケイルは殺して、殺して、殺し続けた。

「……………」

事が終わる頃、そこには食人鬼の死骸の小山が築かれていた。

死骸の小山から飛び降りようとしたケイルだったが、不意に止まり、城壁を見上げた。視界が若干高くなつた事もあり、城壁の向こうには城らしき巨大な建物の上部が微かに見える。

『どうかした？』

「いや。誰かに見られている気がしたんだが……、気のせいかな」

もうすでに別の事に関心を移すケイルを他所に、難民も、生き残りの搜索隊兵士も、そして兵を引き連れ様子を見に来た衛師兵団長も城壁の上から、魔物の屍の頂上で闇夜を見上げる異形を、食い入るように凝視していた。

皆の気持ちを代弁したかのような呟きがどこから小さく聴こえてくる。

「あれは勇者か…？ それとも悪魔か…？」

9 城壁（後書き）

感想、評価、アドバイス、待ってます。

真夜中だというのに、王都デリトは光と人で溢れかえっていた。

ただし、賑やかな活況ではなく騒々しい混乱である。家々の軒先にはオイルランプや松明が灯され、住民であろう者達が慌てた様子で左右を見渡したり、近隣の家屋へと駆け回っていた。

しかし、それもそのはず。魔物の襲来を報せる警鐘が鳴り響く中で暢気に寝ていられる者など居るはずもなく、皆が寝巻き姿のままで着の身着のまま飛び起きてきたのである。今はすでに警鐘は鳴り止んでいるが、状況を確認するために右往左往しているようだった。忙しなく動き回るだけで明確な行動目的が見いだせていない。その様子は狼男襲撃直後のポルミ村に近いものがある。

「一度鳴った警鐘がこんなに早く鳴り止むなんて、今までなかっただろうから、みんな混乱してるんだろ」

サイの説明を受け、納得するケイル。

いっそのこと誤報だと偽って報せれば、皆が安心して各々の家に戻るのだろうが、実際に魔物が襲来があったのだから、そういうわけにもいかない。そして魔物が殲滅されたという報せを受けても、そのあまりの迅速さに皆が半信半疑。不安なのである。

その不安を鎮めたのは、意外にも難民達だ。

食人鬼の全滅後、状況と安全を確認するため南門は開け放たれ、大量の兵士達が雪崩出てきた。そのどさくさに紛れて、サイが難民達を王都の中へと勝手に誘導してしまったのだ。

そして通りで屯していた王都の住民達は、自分達と対等な立場にある難民達に群がり、こぞって事情を訊ねた。

結果、噂はあつという間に駆け巡り、混乱は収まったものの、誰

も家に帰ろうとせず、魔物の大群を単身で屠ったという異形の魔道士を一目見ようと、通りで人垣を形成するに至った。

終始にやけていたアーシャがふふん、と鼻を鳴らす。

『ひひ。見てよ。愚民がゴミのようだわ。気分いいわね』

「気分が悪くなるようなことを言うな」アーシャに返してから、ケイルは左右に目を配り、嘆息する。「……調子に乗り過ぎたな。目立ち過ぎだ」

石畳が敷き詰められた大通り、前後を搜索隊兵士の隊列に挟まれ、ケイル達は歩んでいる。左右にはびっしりと住民による壁が形成され、全身に熱視線を感じる。さながら武勇の凱旋か、あるいは国賓が行進するかのような有様だ。

その実は王家を害した賊の最有力容疑者を連行しているなど、ケイルに好意的な好奇の眼差しを送る彼らは夢にも思いうまい。

アーシャと同じく、どこか嬉しそうなサイがケイルの横に並ぶ。

ちなみにバリーガ分隊から拝借した軍馬はもう必要ないから、と搜索隊に返却していた。

「いやあ、やっぱりあんとんでもなく強いんだね。初めてはつきりとあんたの力を見たけどさ、流石のあたしもたまげたよ」

「……別に」

素っ気無い返事をするケイルに、サイは顔を近付け、若干声のトーンを落として言う。

「でも、ありや魔道じゃないね」

ケイルはサイを見遣った。サイの表情は一転、笑みが消え、真面目な顔でケイルを見詰めていた。

「そして魔術ですらない。勘付いてはいたんだけど、あんたからは魔術の匂いを感じない。あんたから感じるのは、もつと単純な力。

……よく斬れる名刀とか、よく飛ぶ弓矢とか、そんな類の、単純明快故に救いようのない暴力だ」

剣の達人や、弓矢の遣い手ではなく、サイはケイルを武器そのものに例えた。

アーシャも表情を一変させ、つまらなそうに唇を突き出してそばを向いている。

ケイルはゆるゆると首を振った。

「……だから、村でも言っただろ。俺は魔道士じゃない」

サイはケイルから視線を外そうとはしなかったが、不意にケイルの左隣の人物を見て、いつもの軽薄な微笑に表情を戻し、肩を竦めた。

いつの間にか、ケイルの隣には寄り添うようにゼロットが歩いていた。歩き難いと感じるほどに密着している。ゼロットの小さな肩が時折ケイルの腕にぶつかってしまう。

「……どうしたんだ？ 歩き難いだろ」

声を掛けるが応答はなく、少し離れても、ゼロットは進行方向を見据えたままで、すかさず距離を詰めてくる。ケイルが食人鬼を全滅させる場面を見てからというもの、この調子だ。妙に近くに居たがるのだ。

『こ、これはまさかッ、デレ！？ クーデレ少女のデレなの！？』

ケイルはアーシャを完全に無視し、違う話題をサイに振る。

「ところで、あいつは何者なんだ？」

ケイル達の背後、搜索隊後列の先頭には妙齡の女性が歩いていた。黒を基調とした服装に、胸当てと手甲、腰に提げた剣だけの軽装備。同じような服装の兵士が二名、彼女の隣を歩んでいる。

軍関係者であろう事は間違いない。それもかなりの高官であるはずだ。南門が開いた際、一番最初に現れたのが彼女であり、以降は彼女の指示で搜索隊兵士も含めた全ての兵士が動いていた。

サイはちらりと、盗み見るように背後を窺う。

「顔は見たことないけど、近衛兵団のお偉いさんだろうね」

「近衛兵団？」

「城及びやんごとなき身分の人達の護衛を職務にしている凄腕の連中さ。あたしがここに住んでた時も、お目にかかることは滅多になかった。下々の者には係わり合いのない人種だよ」

ケイルは相槌を打ちながら、背後の女性を見遣る。無表情だが、長い黒髪の間から覗く切れ長の目は、鋭い眼光を宿していた。

「それで、俺達はどこに向かつてるんだ？」

その問い掛けに、サイは視線を上げ、顎をしゃくった。その方向にはあるのは群を抜いて巨大な建造物。木造の二階建ての家屋が軒を連ねる通りからでも、屋根越しにその姿を仰ぎ見る事ができるほどの大きさだ。

「どうやら、城に連れて行かれるみたいだね。近衛兵が出張ってくる時点で、間違いないと思うよ」

「城か……」

「そう。この王国を統治している御仁^{ミコト}、国王ディソウ^{ディソウ}が住まう王城だ。こんな深夜に立ち入るなんて、普通有り得ないはずなんだけど」
サイは言葉を区切り、闊達な笑みを浮かべる。

「あんたは頭に超が付くほど特別な賊みたいだね。これからどうなるのか見当もつかないけど、なんかあたしまでちょっと楽しくなってきたよ」

確かに今後の展開など予想できないが、面倒ごとに巻き込まれる可能性は十二分にある。それを知っていて尚、楽しくなってきたとは、随分と呑気なものだ。

「このまま俺と一緒に居ていいのか？」

「くどいね。あんたが嫌がっても勝手に付いてくって言ったろ」

左隣ではゼロットもこくこくと頷いている。

ケイルは微笑しながら小さく嘆息した。

大通りを進むにつれ、見物人の姿も減り、通りを抜けると、閑散とした広場に出た。市街地を円形にばかりとくり貫いたような石畳の大広場だ。今は無人だが、日中はさぞ賑わっているのだろう、全周には宿屋や商店であろう建物が連立し、看板にはケイルには解読できない文字が色取り取りの塗料で書かれている。

そして正面には鉄柵で隔たれた広大な敷地があり、その中央、暗闇に浮かぶように城が聳えていた。規模というよりも、まるでそこ

だけ世界が違ふような、異彩に過ぎる迫力を放つ建造物。

鉄柵の一箇所は開閉式の門になっており、左右には搜索隊の兵士とは装備が異なる数十名の兵士達が横列に整列していた。

「ほら、あいつら」サイが耳元で囁く。「あれが近衛兵だよ」

闇夜に溶けるような全身を覆う黒色の戦甲冑。剣や槍、弓矢、その手に携える全ての武器が通常の物と比べて明らかに大きい。そして装備だけでなく、近衛兵がケイルを見詰める視線も、搜索隊の兵士達とは決定的に異なっていた。兜の中で翳る双眸が湛えるのは、警戒や敵意を通り越した純然なる殺意。

その近衛兵達の目前にまで達すると、搜索隊の隊列が左右に割れ、向かい合うように整列した。取り残されたケイル達は自ずと門の正面に位置する事になる。

最寄の近衛兵が一步出でて、高圧的に声を張る。

「武器をこちらに預けよ」

ケイルは即答した。

「断る」

その一言で、その場の空気は張り詰める。凍り付いたような寂靜、一人の搜索隊兵士が唾を飲み込む音でさえ響き渡った。

ほぼ同時に全ての近衛兵達が各々の武器に手を伸ばす。

「待て」

声を発したのは、距離を置いて佇んでいた先の妙齡の女性だ。彼女は皆の視線を浴びながら、悠々と近衛兵達の前に歩み出た。

「構わない。このまま通せ」

「しかし――」

「命令だ。退け」

低く鋭い剣呑な声色に、近衛兵は腰の剣から手を離し、軽く頭を下げ、道を空けた。

女性はケイル達を見遣り、目配せだけで追従を促す。

敷地の中は広大な庭園であり、随所に噴水や彫刻、手入れの行き届いた草木が端然と茂っている。城の正面玄関へと続く石畳を、女

性の後に続いた。

重厚な扉を前にして、女性は立ち止まり、振り返った。ケイル、サイ、ゼロットと、三人を順番に見据えてから、口を開く。

「自己紹介をしておきましょう。私の名はリルド・オルガン・スパイル。いやしくも王城近衛兵団兵団長の任を授かっています」

サイが息を呑む。衛兵団のお偉いさんどころではない。彼女こそがその頂点、全ての近衛兵を率いる兵団長だったのだ。

「この門を潜る前に、一つだけ確認します」リルドはケイルを見詰めたまま、ゆっくりと言葉を続ける。「貴殿は、なんのためにここへ足を運ばれたのか？」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味です。貴殿の目的が知りたい。聞いた話によれば、貴殿は素直に出頭を申し出たとの事。しかし、先の南門前での戦い……いや、虐殺を見る限り、貴殿ほどの力があれば容易に逃げられたはず。なのに、なぜわざわざ出頭するのか？」

「それは……」

ケイルは言葉を止め、小さく俯き暫し考えてから、向き直る。

「それは俺があんたらの捜している賊じゃないからだ」

言い逃れにしては妙に毅然とした声色に、リルドとサイは微かに目を剥く。リルドは当然のように、サイでさえ何らかの誤解が已む無い事情があつてケイルが賊と見做されてしまったのだらうと勘繰っていたのだ。しかし、今のケイルは嘘を言っているようには見えない。

つまり、ケイルは潔白であり、本当の賊は他に居る。

ケイルは続ける。

「そして、俺もその賊に興味があるからだ」

10 王都（後書き）

感想、評価、アドバイス等々、なんでもいいので待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5985v/>

異形の魔道士

2011年11月7日03時22分発行